

第十編
民

俗

第一章 風俗・風習

一年間行事

町民は古来極めて純朴で祭祀を重んじた。朝起き出る
とまず東方——伊勢神宮、皇居を拍手を打って遙拝し、
家に入っては家内の神仏に茶飯を供して拝礼し、そして
のち正座して茶を飲み食事をした。決してみだりな姿勢
で食卓に臨むことはなかった。水も米も野菜も、天地自
然の物はすべて神仏のお加護の物と信じ、感謝して食す
べきものと、無言の教育をした。米のめしを粗末にする
と目が見えんようになって、と親は子を教育した。その
姿、習わしはどうだったのか、月日をおつてみてみよう。

一月（睦月 むつき）（家内親族友人皆睦まじく）

早くに起き出て若水を汲み、床の間に白紙を敷き、ユ
ズリ葉（譲葉）・ウラジロ（裏白）の上に鏡餅、小餅三
つを並べ橙（だいだい）をのせて神様に供える。その他の家
内の神仏に小餅、ダイダイを供え、農家では農機具にも

餅を供え、昨年の苦勞を謝し、本年の活動を祈願する。
家族揃って鎮守様に参拝し、親類友人宅に年始に行く。
門には松竹と国旗を立て御幣を張り、庭には白砂をま
いて清浄な雰囲気を出す。

若水Ⅱ古い時代には立春の早朝に汲みとる水を若水と
いったが、いつの時代からか元旦早朝に汲みとるようにな
った。昔は桶に小さな注連飾りをつけ、「年の初めに
若水吸めば、万の宝はわれぞ汲みとる」と唱えた。そし
て、桶に白い餅二個を入れ、この水を初茶水として神に
献じ初手洗水とした。落とした餅は串に差して、その年
の天気うらないとした。二個とも表を上差されたら雨
年、その反対は晴れ年、一つそれぞれ違った場合は半天、
半雨といわれた。この餅は乾かして十四日のモチの日に
粥に入れて神様に献じた。

若塩Ⅱ昔、慶賀の人たちが正月二日の早朝に若塩とし
て売り歩いた。各家庭の人たちはいくらかの小銭を紙に
包んで塩と交換した。その塩は三方やお膳にのせて床の
間に供えた。

六日山Ⅱ生木を切ってきてかまどの上にのせて、かま
どまつりをした。これを山の口開けといって大きなカシ

の木を庭先に立てた。

ホダレⅡ穂垂れ 完全なマカヤの葉を数枚束ね糊をつけてモミガラで稲の穂のようにしてかけて置く。これを苗代を作る時田の畦に立てて置き、実りのよいように祈る。

ハマ投げ、ネン打ちⅡ正月になれば男の子はハマナゲ、女の子はマリ打ちを楽しみ、また、タコアゲも盛んに行われた。秋のころになると男子はネン打ちも楽しんだ。

(注) ネンとは一尺から二尺くらいの生木の先をとがらして地面に打ち込み、相手のネンを打ち倒す遊びで、危険を伴った。タコもマリも手作りで、今のように買う者はなかった。

七草祝いⅡ七歳児のお祝いで正月七日に行われた。その年七歳になった子供は母親又は兄姉に伴われて、隣近所の七軒の家を回って七草粥をもらい歩く。訪問を受けた家ではかゆのほかにお祝い金を与える。

七歳児の家では親類、友人を招いて盛大な祝宴を張る。あまりに派手になったので、町教育委員会では合同のお祝いを提唱した。各校区の婦人会や自治公民館が主

催して合同祝賀会を催したので、一時は参加者が多かったが、近ごろまた個人別に行うようになった。

成人式Ⅱ満二〇歳になった人々をお祝いする。一月十五日の成人の日に中央公民館で町主催で行われる(外に働きに出ている人が正月に帰って来るのでこの機を逸せず一月の早めに行う)。祝辞、記念品贈呈、成人者の感想発表、座談会などが行われるが大変派手になったので、平常服で出席するよう望まれているが、男子は背広、女子は振袖姿で出席するので簡素化が叫ばれる。大方、県外出稼ぎ者で、服装は各自用意してしまいうので簡素化はむずかしい。

モツⅡ十四日、十五日はモツといわれている。栗餅・米餅を搗いて小さく四角に切って柳の枝にさすと、米餅は白、栗餅は黄であたかも金銀が成り下がっているようである。これを家内の神仏の前に供え、墓場にも持って行った。これを芽の餅といって、いつしか十四、十五日をモツというようになった。

ハラメウツⅡ朶打つ 昨年の正月以降嫁に來た人の所に一五歳以下の男の子たちが、木で作った男根を持って行って早く立派な子供を、ハラムようにとのマジナイで

お祝いをした。お祝いを受けた家ではその男根を床の間に供え、子供たちにはご馳走をした。

ハツカ正月に二十日にひもじい思いをする一年中ひもじい思いをするといわれた。それで当日は仕事を休んで正月の残り物など食べて腹をふくらましていた。

山神祭 山の神を祭る日である。旧正月、五月、九月の十六日は山仕事をする人たちが、仕事を休み客を招き酒宴を催す。この日は山の神が狩りをする日とか、木種をまく日とか、木を数える日とか、また山の神は女神で洗濯をする日とかいわれて山に入ることが禁じられている。もし禁を破る人は山で大けがをするといわれている。今は個人的に山仕事をする人が従業員を招いてお祝いをする。

二月（衣更着 きさらぎ）（寒い月であるので衣を更に着ろという月）

鹿児島神宮の初午祭に多くの男女が参拝に行く。

十一日は町内各神社で紀元節祭が斎行される。

立春の前夜は福は内、鬼は外の豆まきがある。

三月（弥生 やよい）（動植物がますます生々と栄える）

町内各小中学校の卒業式、高校の入学試験がある。

下旬には彼岸が来るので、ヒガンダンゴが作られる。各家庭とも墓参りが行われる。

三日は三月節句で女の子のヒナマツリがある。都会では、豪華な雛人形が飾られるが、町内ではあまりない。

四月（卯月 うづき）

小中学校の入学式、就職者の任地赴任で壮行会がある。

五月（皐月 さつき）

五日は男の子の端午の節句で鯉のぼりを高々と立てる。家庭では邪気を払うために、ヨモギとシヨウブの葉を軒に挿す。ちまき（アツマツ、白マツ、クワクワランモチ）が作られる。

観音祭は四月八日、また五月八日に行われる。牛馬が元気に育つように霧島及び寺原の六観音様には参拝者が多い。

六月（水無月 みなづき）

田植えの月である。昔は人手であったが、今は機械植えなので、たちまち田植えも済んでしまう。月末には大祓（はらい）が各神社で行われる。

七月（文月 ふづき）

七日は七夕まつりで牽牛、織女の星祭り、十六日は戴入り。この月の十六日は虫干しをする。

八月（葉月 はづき）

七日は七夕まつり、昔は七月七日に行ったが、今は一月後れで行われる。色紙の短冊に文字を書き、また女の子は紙で着物を作って、長い生竹の枝に下げて庭先に立てて星まつりをした。七日は町内各神社において七夕祭（夏越祭）をする。その年の七歳児を集めて茅輪くぐりをして人がたを水に流す。昔は戦没者を弔うために灯籠をともしたので六月灯ともいった（ずっと以前旧暦六月に行った）。

へわ（幣輪）くぐりといわれて、七歳児にとっては大事件な行事である。

祇園祭は商売のまつりである。おみこしを山車に乗せて霧島西口駅前の広場からと、麓地区の両地で斎行された。一時踊りなど特別舞台で行われ盛んであったが、今は消えてしまったのは寂しい。

十四日、十五日は一月後れの盂蘭盆会で祖先の霊を祭る。十三日夜は門口に迎え火をたき精霊を迎える。床の

間及び仏壇先祖棚の前に新しい提灯をともし供え物をして先祖の霊を慰める。昨年の盆以後死亡した人の霊はハッジョロといって特に丁重な取り扱いをする。県外に出ている家族も盆と正月だけはといって帰って来て皆と一緒に墓参りをする。遠く近くの親類縁者と共に霊前で会食して往時を偲ぶ。

下中津川の犬飼集落では盆の十五日の晩に、前を流れる中津川で精霊送りの火流し行事が行われている。この行事は約三〇〇年も前から行われているもので、昔からのきまりは一四歳の子供頭が、七夕の終わった翌日、八日ごろから集落の一〇歳以上の男の子を集めて、火流しのいかだ作りにとりかかる。

いかだは昔から八尺四方に組み合わせ、馬の鞍の下ビラ、豆殻、麦殻など燃えやすい物を高く積み上げて作った。終戦後はモウソウ竹を組み合わせた土台の上に、これらを積み上げて作った。どんどん、たきぎを燃やして流すので、いかだ作りが始まると年下の者はたきぎ取りに毎日行かされたものだったという。最近では、たきぎの火の粉が飛んで火事の恐れがあるというので、各家庭から盆ちょうちんをもらって来て、いかだの上にかけて渡



火流し（下中津川大飼）

し、中のロウソクに火をつけて流し、同時にいかだにも火をつける。子供たちはいかだの周りを泳いだり、歩いたりしながら、おもむろに下流にいかだを流していく、いかだからは小型花火が何十発もあがる。御精霊様は最後の夜をにぎやかに送られてゆく。ゆらめく火が川面に照り映えて川岸から見物している人々は感動のうちに先祖の霊を送るのである。

火流しはトウロウ流しともいい、他の集落でもしていたが、今は大飼だけに残っている。昔はお盆がすむと神

仏にお供えた菓子や果物を、新しく作った木の精霊舟に乗せトウロウに火をともして川に流したところもあった。静かに流れ行く火流しを見ると、幻想の霊界に引きずり込まれてゆくような感じがする。

九月（長月 ながつき）

だんだん日が短くなってくる。立春の日から数えて二百十日、二百二十日と厄日がある。秋分の日前後七日間を彼岸といい、祖先の霊祭（たま）りがあり墓参りが盛んである。

十五日は敬老の日で町内各大字で敬老会がある。七〇歳以上の老人を招いて町長が臨席して記念品が贈られ、八〇歳以上には年金も交付される。各校区の主催者側は酒肴（さか）のもとをなしをし婦人会などの踊りもあって、永い間働いてきた老人に感謝の意を表し、更に長寿を誓う。

旧八月十五日満月の夜、綱引きが町内各集落で行われる。一五歳以下の少年たちが主催でカシタニセの指揮で部員たちがカヤ、ワラ、カズラで青年たちの協力で大きな綱をない、地区の人たちを呼び集めて月明かりの下で綱引きをする。相撲取りも行われる。昔は男の子ばかりの集まりであったが、今は女の子も交じっている。当夜

は各家庭で臼の上に箕をのせ萩の花やカヤの穂、ほか秋の七草を活けた瓶をのせ、カライモ、栗の実、柿などを供えてお月様を祝った。非常に情操教育のため良い行事と思われるが、近ごろ型ばかり残っているのが寂しい。

十月（神無月 かんなづき）

十日は体育の日であるから、その前後に各小学校及び中学校の運動会が催される。また、町主催の体育祭が行われて各校区の体育協会の選手が競技をする。この月に豊祭―方祭―穂祭がくる。収穫の秋で、気候も良くなるし、農家では最も楽しい行事である。アマザケ、芋コンニャクを作り、親類縁者友人が集まって酒宴が開かれる。

毎月の旧二十三夜には、二十三夜待ちがある。殊に正、五、九月の二十三夜待ちは盛大にされた。旧暦は新暦より一月遅いので十月の二十三夜待ちは盛んであった。二十三夜待ちをすると望みがかなえられるといわれているので、故郷を離れて他県に行っている人、また兵隊に行っている家では人々を招いて、酒宴を開き、三味線、太鼓で月の出を待った。月が出ると庭に出て、これを拝んで武運長久を祈った。現在は行われていない。

十一月（霜月 しもつき）

日が短くなり、霜が降りるようになる。

三日「文化の日」を中心にして町公民館では各種団体を集めて町民祭を行う。講演、演芸、各種の製品展示即売会などがある。また、この日町行政に貢献した人々の表彰式もある。

十二月（師走 しわす）

各種団体の忘年会が毎夜のように行われ、旧暦の十一月になると神道を信仰している家庭では、年一回の氏神祭がある。氏を同じにしている人たちが主筋の家に集まって氏の神、先祖の神、水神、家内のすべての神を祭る。また、組合でする所もある。神職を頼んで御幣を新しい物と替え、この一年間の穢れを祓い来年の幸福を祈る。祭典後は会食してお互いの親密を深め健康を祈る。年末の大事な行事である。

〔参考〕 不特定な行事

ホソカンジン（疱瘡勸進）は今はほとんど途絶えているが、英国のジェンナーが種痘を發明しない以前は、疱瘡の患者が出ると、伝染病であるため、これにかかると顔

面にデキモノができ、その跡が残って見苦しい容姿になった。これが流行すると聞くと、郷中が話し合つて病氣祈願をしたり、ホソカンジンの一団をつくり、一戸から若い人たちが必ず入団しなければならなかった。三味線、太鼓を打ち鳴らし、若者が変装して踊りながらよその集落を訪れて、米をもらつて帰り、米飯にして食べる。するとホウソウにからないと信じていた。若者たちはこれをかえつて楽しみにして回つた。

庭あがりⅡ農家が秋のとり入れを全部すませた夜は庭あがりとしてお祝いをした。昔は穀物を広い庭に干して脱穀をしたので、収穫がすむと、庭あがりをして夜は家族一同にご馳走をした。まず、自分たちが食する前に神様に供え感謝をして、ほかに一膳用意して庭先に「庭太郎どん」といって神様を祭つた。素朴な農民の心根が表れて貴重な行事であつた。

さのぼりⅡ農民は一作、一作ごとに仕事がすむと、「さのぼり」と称してお祝いをした。殊に田植えは大変な労働であつた。田を鋤き返すこと五、六回で雨が降つても牛を田んぼに引き入れて仕事にはげんだ。田植えがすむころになると、人も牛も疲れきつて足先からは血が

にじむこともあつた。植え方も大変で、二〇人ぐらいの人たちが田の中に並んで競争で植えた。雨の降る日はことに大変で、身体中、シッポリぬれてしまった。それが自家の田、他人の田と一週間以上も続いた。その田植えがすむとホツとする「さのぼり」があつた。個人個人でもするが、組合で合同で行う慰安日にもなっている。

語源は「サチのさわり」ではないか。サチという「いなだま」をしつかりと田に付着させてもらうために、神にささげた供え物を感謝しながら会食することであつたろう。昔はポタモチを作り、野草の混じつたシメモノを作つて皆が食べてお祝いをした。現在は耕転機及びバインダーがあつて、昔のように田植えも苦しくはないが、農家では年間行事中最もうれしい行事であり、組合の親密な行事である。

二 牧園の方言

鹿児島県の方言は、武家政治七〇〇年の間、島津氏の統一権力に属していたから、地域的に多少ニュアンスのちがいはあつても、大体同じような方言圏をなし、他県

に見るような雑多性のないのが特徴であるといわれている。地方によっては、アクセントやなまりで、その地方独特のものもあるようであるが、牧園で使われている方言は、県内で一般に使われている方言と同じで、牧園独特の方言はあまりない。

いまでは、標準語が広く使われ、方言はだんだんすたれつつある。ふるさとの方言で育った者にとって、その方言を愛するのは自然である。鹿児島県の方言には、敬語や古語も多く含まれていて、文化財としての価値も大きい。永く保存していきたいものである。

方言の中には、物がなくなつたためにすたれてしまつた方言もあり、また、今はもう全然使われていない方言もある。たとえば、のん(蚤)、しため(しらみ)、キセイ(煙管)、さしげた(高下駄)、トンコツ(きざみ煙草入れ)、はんづ(水がめ)、ぎったまい(ゴムまり)、ずいや(料理屋)、せっちん(便所)、サコンタロなどがある。

あ

あいたけ
あぐっちゃつ
あけつなつ
あせくつ

ある限り全部
口を広く開く
期待が外れる
掻きまわす

あつたらし
あつなか、あつね
あつばつた
あとしい
あとぜつがすい
あとんけや
あばつきらん
あまかせしんまつ

い

いかなこて
いけんしてん
いけんでんこげんでん
して
いけんもこげんも
いじくつ
いたぐら
いっかすい
いっきんこめ
いっぐわぎえ
いっごっさつごつ
いっこぼす
いっしれんこつ
いっぢやがつもなか
いっでんかいでん
いっつすい

惜しい・もったいない
あぶない
てこずる
かかと(踵)
後から考えてゾツとする
この前の時は
処理ができない
大暴風雨

まさか

どうしても
どうにかこうにかして・どうでも
もうどうでもして
どうにもこうにも
まぜくる
あぐら
言い聞かす
早く(一騎も来ぬまに)
恐ろしい
至るところで・次から次に
湯水をこぼす
余計なこと
一文の値打ちもない
いつでも
絶えず・ひっきりなし

いっとつどま
いっぺこつべ
いっもはん
いみし
いんまざつ
う
うじよて
うっすい
うったいもたい
うっちゃめ
うづつ
うつとけた
うっぼがし
うてあわん
うどばれ
え
えかげんに
えさつすい
えじ
えしえんこつ
えのこそくい
お
おっきやがっ
おつ
おつとい

一時でも・少しでも
あつちこちに・一生懸命に
いきません
敵しい・烈しい
先刻
大所帯
捨てて
喜びが重なるさま
中止
うづく・痛む
うち倒れた
大損
かわりあわない・相手にしない
むくみ
いい加減に
あいさつする
ずるい
余計なこと
家の小修理
起き上がる
落ちる
奪い取る・盗む

おてちつもした
おらつ
か
がいたくつ
かかあんねこつ
かかいよな
かかじつ
がずん
かたいぐち
かたぐつ
かたすつ
がつ
かつごんほかじやつた
がつつ
かつとしゅ
かぶしつ
かめやしな
かんじやつごろ
かんたぐつ
がんだれ
き
ぎいぎいも
きかんぼ
きけもん

安心しました・ホツとしました
叫ぶ
叱りつける
途方もないこと
関係するな
引つ掻く
嗅ぐ
交互に
担ぐ
仲間に入れる
叱る
思いもかけぬこと・予想外だつ
た
全く・丁度・ずばり
大方・あちこち
かじる
かまってくれるな
節約する人・けちんぼ
噛みくだく
役立たぬ・間抜け
ぐるぐる回る・きりきり舞い
いうことを聞かぬ奴
敏腕家

きつぎまな	意気地ない
ぎっし	いっぱい
きつしやなか	汚い
ぎったまい	ごむまり
きどつな	殊勝な
きばっ	頑張る・氣張る
きぼせ	心細い
きもがきるっ	思い切りがよい
く	
くいめだい	来ないだらうよ
くそひっかぶい	いくじなし・臆病者
ぐぜこっ	ぐすぐすとくどいことを言う
くつつ、くつつ、しっ	食うや食わずの窮屈な暮らしのこと
おっ	
ぐらし	かわいそう
ぐわんたれ	安物・下等な物
け	
けころだ	転んだ・つまずいた
げしかなわんこっ	力のおよばぬこと
けすいぼ	生意気な奴
けっごんす	しりの穴
けっさるっ	腐る
げった	変種した
けなぶい	人をばかにする

こ	
ここいやし	心やすい
こしたゆっ	料理する
こじっくい	小男
こじれっ	こじれる
こそわい	くすぐったい
こだくっ	小切りにする
こだんきた	小才のきいた
ごっそい・ごそっ	すべて・あるだけ
ごったん	板張りの三味線
こなす	いじめる
こばむっ	片付ける
こべーさあな	失礼な
こまんえ	器用
こまんえもんじや	器用である
こらしもた	これはしまった
こらのさん	これはたまらぬ・これはいかん
こらゆっ	我慢する・こらえる
ごろいと	ついに・とうとう
ごろた	丸太
ころっ	転ぶ
ごんこえつ	大きいお灸・子供を叱りおどす
ごんもさつも	時・キカントゴンゴエツヲス ユッド だれでも彼でも

さ

さいがも
さかしんめ
さしげた
さっぱつ
さばけもん
さまあなか
さんとつさがい
さんによ
し
じつどえた
四の五のゆつ
じもねこつ
しんそののねこつ
す
ずいや
ずしただつ
すすくつ
すつからかん
すつたい
ずつねわろ
すでぶい
すもいくせ
すもつ
ずるつ

ぜひと・無理やりに
さかさまに
高げた

肉がこわばる
手際のよい人
みつともない
時期はずれ・ひどくおくれた様
計算

あきあきするほど食った
なんともかんとでもいう
申し訳ない・辞もないこと
えこひいきのないように

料理屋
ずれ下がる
煤ける

からっぽ
すつかり
ずる賢い・油断のならぬ奴
何も持たずに・素手振るい
布など焦げくさい
くすぶる
全部・すべて

すわぶつ

すんくじら
ずんだれ

せ

せくつ
せしこた・せしこ
せずつ
せつちん
せつなか
せつべ
せむつ

そ

そがらし
そげんゆたち
そつせなこつ
ぞつぶい
そねばつ
そびつ

た

たかんばつちよ
だつがあかん
たつちんこめ
だつもね
だまかす
たまがっ

しゃぶる・口つけする

隅っこ
なりふりかまわぬ

はにかむ

あわてた・忙しく振る舞う
催促する

かわや(廁)・大便所・雪隠
せつない
精いつばい
攻める

たくさん

そう言つても
変なこと

ずぶぬれ・びつしより
そりかえる
引く・引つ張る

タケノコ皮製の傘

らちがあかぬ
直ちに・すぐに

だらしのない
だます
驚く・びっくりする

たましきつ
たまつ
だれつ
ダンがさ
ち
ちかやね
ちつとやそつとで
ちよかつと
ちよつくらけつ
ちよつしもた
ちよろまかす
ちんがらつ
つ
ついだん
つがあんねこつ
つぐろじん
つっこい
つまし
つるんたらん
つんげし
つんもい
て
てがまし
てげてげ

気の利いた人
長持ちする
疲れる
洋傘・こうもり傘
支障はない
大概なことでは
不意に・ちよつと・うっかり
茶化す・からかう
しまった・失敗した
ごまかす
こっぱみじん
越中ふんどし・ツイダンナ
とんでもないこと・予期しない
こと
皮膚の内出血・唇の紫色
大便秘
けちけちする
やつとこさで足りた状態
引き続いてそのまま・すぐに
水など漏れ出る
手出しが早い・うるさい状態
ほどほど・いいかげん

てしけはしけくらわん
でしなこつ
てのんいく
てんがらもん
と
とざめなケガ
どそつ
とつかやす
とつけんね
とつどこやね
とつまらん
どへ
とほんねこつ
とめくやうたん
どんじ
な
ないすいもかいすいも
ないすつとよ
ないどこいじやごわは
ん
なつぐれ
なつちやらん
なめつ
なんなかっ
てしけはしけくらわん
大事なこと
連れだつて行く
お利口さん・あばれん坊
思いがけないけが
ろうそく
ひっくりかえす
意外な・常識はずれ
とりえはない・取るところはな
い
あてにならん
げつぶ
塗方もないこと・見当ちがい
収拾のつかないこと
大きな木桶
何をしてもかにをしても
何をするのか
何どころでない・ほかのことは
かまう余裕はない
泣きながら怒る・泣き狂い
間違っている・なっていない
なめる
もたれる・よりかかる

なんちゅあならん なんでん なんとんしれん奴 に	何とも言いようがない 何でも ろくでもない奴
にぎい にくわさつ にげ につぎやけ ぬ ぬしただい ぬつきゃん ぬぶつ	欲深い奴・けちんぼ につこり・にくわさつ笑う にがい(苦い) にぎやか 軒したたり・雨だれ 間のぬけた うめる(湯に水を入れぬるくす る)
ね ねいぼ ねしゅがよか ねまつ ねんじゅ の のさつ のさん のん のんくやす のんぼいくんだい	そばと芋のねりもの 本心が良い 腐る 年中・一年中いつでも 授かる こらたまらぬ・困る のみ(蚤) 飲んで身代をつぶすこと あっちこっち・登ったり下った り

は はあつだめ はいと ばかすったん ばこ はしと ばたぐろ はたつ ばったいいかん ばつち・でこんばつち はつちく はまなげ はめつくつ はらがきいうえつ はらかつば はらぐれ ぼるつ はんぎい はんづ はんとくつ ひ ひえくせ ひしてごし ひったまがった	
--	--

きだ 摩溜め いつも・常に ばか野郎 奪い合う 力強く・しつかり ばたばたする・あばれる 急に どうにもならぬ ももひき・ズボン下 行ってしまう 木の輪をころがして双方から打 ち返す競技 精出す・はげむ 腹がたつて 怒りんぼ じょうだん ばれる・露見する 牛馬の飼料入れの桶 <small>おけ</small> 水がめ つまずいて倒れる 生臭いにおい・生魚のにおい 一日おき びっくりした・驚いた	
---	--

ひっちゃえっ	落ちる
ひとぼちいいせん	まんじりともしない・まばたき
びびんこ	ひとつもしない
ひめぐい	肩車
ひよこし	柱暦
ひわるっ	火吹き竹
ひんじやごろ	ひび割れる
ひんだれ	貧乏人
ひんじい	足のついた木製の洗面器
ふ	肘
ふがまつ	ほった・横づら
ふけんねこっ	有りそうもないこと
ぶちほ	不調法・不器用
ぶつ	泡
ふっきやっめ	拭き掃除
ふてこつゆう	小言をいう・ぐちを言う
ふてめおた	たいへん難儀した・大損した
ふゆしころ	怠け者・不精者
ふんたくっ	踏みつける
ふんと	全然……だめだった
へ	
へがむっ	減らす
へっ	肩こり
べっじゅあごあはん	別条はない・差し支えない

べぶ	牛
へんもへんもすい	前をうろろする
ほ	
ほおなっ	嘆く・くよくよ泣きことをいう
ほがす	穴をあける・ヒッポガスも同じ
ほがね	法がない・理屈に合わない
ほこれ	ほころび
ほたいうつ	売ってしまふ
ほたいなぐ	投げとばす
ほっけもん	大胆な人
ぼっじゃ	駄目だ
ほとびい	ほとびる・水や湯に長くつけて
ほぬれ	いるとふやけること
ほのなかわろ	ずぶぬれ
ほぼれ	あてにならぬ奴
ほめっ	お多福かぜ
ま	蒸し暑い
まくじい	かきみだす・かきみだされる
まさけ・うたん	間に合わない
ましくら	真正面
まぜくい・たくっ	混ぜちらす・混乱させる
まちっ	もうちょっと
まってこっ	待ちあぐむ・待ち遠しい
まねけん	時々

み

みこえ

みたかかい

みっぎい

みと

みとなしごろ

みとんね

みのきれ

みほがす

みよざまんなか

む

むいね

むかすね

むくろいき

むけづら

むけめ

むでなやつ

め

めかかつ

めぐいぼ

めしげ

めつてなごあはん

難儀である

見かけ・外見

絶交すること

夫婦

みつともない奴・不潔な人

見つともない・汚い

身内・身より・親類

見通す

見るにたえない

かわいそう・無理とつかう時も

ある

向こうずね

体ごと・猛烈に

向こうづら・顔の正面

出迎え

たよりない奴

目にかかる・見つける・目に

く

めぐり棒・ぐるぐる回して穀物

を落とす棒

しゃもじ

めつたにない

めんどん

も

もえ

もげ

もつそな

もつちやくつ

ものでけはっちゃん

ものめい

もへ

ももじい

や

やせぎつ

やせひぼけつ

やちゃこん

やつがね

やまおこ

やんきも

やんめたる

ゆ

ゆくさ

面（鬼の面）のような人

模合・たのもし講

あくどい甘さ

猛烈な

持ちあげる・人をおだてる場合

にも使う

はれ物のたくさんできている人

神参り

最早・早くも

もみくちやにする

やせた人・ヤセギツチヨともい

う

やせこける

ぼうつとして何も知らぬこと

わけがわからぬ・しつかりして

ない・役がないが、もとの言

葉

山矛・丸太でつくったにない

棒・わら束などをかつぐ

しゃにむに・あくまでも

病気をしている人

ようこそ・良くこそ

ゆつたりと ゆほで・しほで よ	よいけつ よいなこて よかあんべ よっころつ よっころ よのいもて よのよして よも よんごぎね よんごひんこ	わ わがえ わざい わっぜえ わやつ われこつぽ	ん んだもー んだはら
ゆつたりと 言い放題・仕放題	引き返す・ふりかえる ようやくのこと 良いあんばい・よい気持ち 寝ころぶ 欲ばり 夜になるころ・夜の入りもと 一晩中・夜通し 猿	自分の家・わが家 恐ろしい・イッグワザエも同じ ひどく・大変に じょうだん・おどけ 悪いことをする坊や・あばれん ぼう	女の人が感嘆した時発する言 葉・ンダモンタインともいう あらまあ・おもに女の人が驚い

んにやんにや

た時に発する言葉

これは男の言葉で、やはり感嘆した時発する言葉。ホーとか、ヤレヤレとか、ソウカソウカとか広く使われる。また、いやそうじゃない、という時を使う。その時は、ンニヤとだけいい、しかも発音を短くいう。

三 俚 諺

俚諺^{りげん}とは、「世間に広く行われることわざ」と辞典にある。私たちの祖先が、いろいろな体験から言いだしたことであろうが、これを通して祖先の生活や考え方を知ることが出来る。すでに迷信として、しりぞけられている諺^{ことわざ}もあるが、今日われわれが生活していくうえに、実^{じつ}にうがった教訓的なものが多い。われわれの周囲で、日常使われている諺を集めてみた。

気象・農事

暑さ寒さも 彼岸まで

朝焼けは雨 夕焼けは晴れ

木の葉が光つ時は 雨前

夜止んの雨は 三日うち来つ

梅雨や 雨七日 日七日 風七日

梅雨の夕映え

十月の裸日和

女だまかし(女に、早く冬支度をせよの警句)

岳々は雪 下々は黒ジヨカ

一種 二肥 三作い

彼岸過つの 麦の肥は効かん

遠か上田よつか 近つ下田

雪年や 豊年

ゴゼムケとシオトシ(取り入れは、夜のへらんこたいか

ん)

竹に実がなれば 飢饉年

雨瓜 日茄子

出穂見て二十日 出そろて二十日

木六 竹八(木は六月、竹は八月が適伐期)

木元 竹裏(木は元から、竹は末から割れ)

八十八夜は 地の内(大豆の種子まき)

柿の葉に 三粒包んがなつ時が時期(大豆の播種)

二百十日は 地の内(ソバの播種)

ほこれゾマ

種苗は タダでもらうな

足形は田の肥料

梅伐らんばか、桜伐いばか

梅はたたけ 柿やつん折れ(こうして実を取れば、来年は

またたくさんなる)

谷杉、岡松(杉や松の植林の適地)

野菜も 半世帯

処 生 訓

若けうつの難儀は 買てでんせよ

難儀ん時の気張い

大取いよつか 小取い

魂や使けどつ トンコチャ下げ道具

ピンタ下げにや ゼンないらし

言こちや明日言え うんめもんな今夜食え

ピンタは結てん 人事ちや言な

寺は言てん 坊主や言な

一方聞て 沙汰すんな

人ん口には、戸は建てられん

モノゴチャ堅言え 酔味噌はゆるせ

人ん うわざも七十五日

火のなかとこい 煙は立たん

人は人中 田は田中

老人と金釘や ひつこんだうえはなか

世ん中 色気と血の気んなかたおらん

嫁女もられは、親もらえ。嫁女は親見てもらえ

鬼も十八 番茶も出花

生っ別れにや嫁てん 死ん後にや嫁いっな

嫁に行つた娘が木戸を通つたぶんで、世帯が潰るつ

小糠三合あれば 養子いっな

嫁女ん仲人や 下駄を三足踏んくやす

仲人っすいよつか 逆立つせえ

暁と嫁女は 新かほどよか

コツテ牛や死んでん 前田は荒れん

腹は立て損 怪気は し損

短気は 損気

先勝や 冀勝つ

ころざしや ニラン葉

お茶と情は 濃い濃いと

義理と張や 生爪をおけてんせえ

わが子は 荷にやならん

持たん子にや 泣かん

孫頼んよつか 杖たのめ

腹せかん子は 胸がせつ（わが腹を痛めん子は、いろいろ

心配をして胸を痛むつ）

親下男 子旦那 孫ハチラツ（乞食）

子は親ん 鏡

親ん思な 子せえ

親ん意見と茄子の花は 千に一つのあだもない

キツゲと、マツゲ（間違い）はあいもんじや

冷や焼酎と 親ん意見な後からきくつ

二十過ぎてからん親ん意見と、彼岸過ぎてからん麦の肥は

効かん

親類は、二従兄弟づい 三従兄弟は見離せ

遠か親類よつか 近つ他人

ばかと 鉄な使けよ

後家にや花咲く 男やもめにやウジが湧く

スヨ（長男）ドンドンに 二男魂

病弱八年

腹八合い 病気なし

三味線の無か家あ、あつてん 琴（事）ん無か家は無か、有い

ごつして無かとが銭 無かごつして有つとが借錢、わが家ん

米ん飯よっか 隣の麦の飯

仕事しごとちや小皿で 飯めしやドンブイ

大釜うがまん飯 小鍋こなべん汁

山戻いの カライモン飯

はじめチヨロチヨロ 中ドンドン 子どんが泣てん蓋取ん

な (飯をたく時の火かげん)

招宴じょうゆは一番招宴 風呂ふろは二番風呂

ダレ (疲れ) 馬ん 水クレ (飲み)

屁ひつてん ウソひんな

盗人たうじんとな付ぎ合てん ウソヒイゴロとな 付ぎ合な

男は三年に片頬かほ (男はゲラゲラ笑うな意)

泣こかい跳とばかい 泣こよっか ひつ跳とべ

猫なで声い 油断すんな

三つ子ん魂や 百づい

戦見て矢作い 盗人見て縄ね

かからん蜂はちにや刺さされん 渡らん河にや 流されん

よかもん食て 油断すんな

銭取り役目 死ん役目

借つ時のえびす面づも 戻すつ時の鬼面おんづも

立つちよい者な 親でん使え

立つちよつと 馬牛つなつと

アマメが フを笑う

魚ん番に 猫

いかん時や 押つされ

足が四十八本あつてん ムカデも転つ

奥歯い 物はすんだよな 物言

四 本町にある薬用植物

大体において葉や根を陰干しにして煎せんじて飲むか、局所につける。

いちじく 緩下剤 いぼ 清血剤 痔疾

うめ 黄芩 鎮咳祛痰 風邪

ざくろ 下痢止め コシケ 条虫駆除

なんてん 咳止め 吐瀉止め 中風 咽喉の腫物

もも 小児アセモ

だいたい 健胃剤 発汗剤 フケ落とし

しゃくやく 婦人病 解熱 腹痛 腰痛

たんぼぼ 緩下剤 便秘 胃病

にんにく 肺病 コレラ 寄生虫予防 吐血 吐瀉 肝

臍病

はこべ 盲腸炎

またたび 強壯剤

五 俗 信

いつの時代にか私たちの祖先が、このようなことをいい、信じる人がいたり信じない人がいたりしたであろう。この中には今もなお言われ実行されていることもある。一口に迷信といえず風俗習慣となつてゐるものもある。いずれにしても昔の人の暮らしの、あるいは心の一面にふれてなつかしい。

俗信は主として古代の信仰や呪術が宗教にまで高められることなく、民間に退化残存したもの、また宗教の下部的要素が、民間に脱落し退化沈潜した広義の信仰慣行で、組織をなさない、雑然たる呪術、宗教的心境現象である。

俗信のうちには現代の科学知識からは不合理なものが多いが、それらの中には社会的には、はなはだしい実害を及ぼすものもある。それだけを迷信とよぶ。俗信は昔の人の人生観や信仰の変遷をうかがう貴重な素材として受けとるべきである（俗信の定義は『民俗学辞典』によ

げんのしょうこ 下痢 はれものを洗う

どくだみ 胃病 皮膚病 アセモ 毒下し

おしろいばな 頑癬

ききょう 去痰 肺病 その他胸部の病

からすうり 便通過多 胃腸の熱 鎮咳祛痰 月経不順

化粧水

おおぼこ 婦人病 花柳病 胃病 百日咳 痙攣 赤痢

利尿

ゆきのした 小児ひきつけ 耳の病

ちようせんあさがお 腫物 喘息煙草

せんぶり 健胃剤

ふき 切り傷

あさがお 下痢 リウマチス

ぼたん 関節炎 解熱 月経不順

よもぎ 咳の諸病 もぐさの材料

やまごぼう 利尿剤 腫物 脚気

いのこずち 利尿剤 通経 産前産後腹痛

ほおずき 寄生虫 解熱 通経

つばな 解熱 喘息 黄疸 糖尿病 利尿 腹痛 発汗剤 百日咳

おみなえし 吐血 産後の薬

る。

次に今も唱えられている、いくつかの俗信を掲げる。

鳥が鳴くと不幸がある。

家の上を鳥が鳴いて通るとその家に不幸がある。

軒先につばめが巢を作ると良いことがある。

ふくろうが夜鳴きすると不吉、人が死ぬ。

めんどりが鳴くと不吉になる。

まよい猫が入りこんで来ると幸福になる。

猫にえびを与えるとおんぼになる。

猫をいじめるとぜんそくになる。

盆のころのとんぼには人の霊が乗っている。

朝、くもが出て来ると良いことがある。

くもが昼降りて来ると悪く、夜降りて来ると良い。

昔話を昼語るとねずみが小便をひっかける。

亀に食いつかれると雷がならなければはなさない。

柿の木を薪にすると馬が死ぬ。

床の下のたけのこを食べると一寸法師が生まれる。

棕櫚の木が軒までくると不吉になる。

椿の花を神様に上げてはならない。

女がたこを食べると手の八本ある子が生まれる。

みかんの二袋くつついたものを食べると双児が生まれる。

黄身の二つある卵を食べると双児が生まれる。

米の飯をすてると目が見えなくなる。

珍しい物を神前に供える前に食べると口がゆがむ。

みそこしをかぶるとできものができる。

囲炉裏を汚くすると病人がたえない。

土用の丑の日にうなぎ、川魚を食べると薬になる。

その日に温泉に浴すると一年中元氣である。

巳、午の日に田植えをするな。

地火の日には植え物をするな。

友引に葬式をすると不幸が重なる。

三隣亡に家の棟上げをすると火災になる。

悔みには自分の生まれた日に行くな。

山神の洗濯日は十六日だから山仕事は休む。

盆の十六日と正月十六日は地獄の釜のふたの開く日である。

る。

耳の大きい人は長生きする。

猫が顔を洗えば天気が良くなる。

ふくろうが鳴けば翌日は天気が良い。

頭が痛むと翌日は雨となる。

三毛猫の雄が生まれると幸福が来る。

こんにやくの花が咲くと不幸になる。

幸運の人の葬式の日には天気が良い。

遠方に旅立つ時二寸角の紙に、賦の字の「、」のない字を書き床の間のナゲシにはりつけ、帰ってから「、」を書き入れよ。

火事の時、女の腰巻を振れば延焼しない。

箒に手拭いをかけ、さかさにして置くと長居の客は帰る。

雷のなる時仏に線香を立てると落雷しない。

釘を踏んだ時カンナでたたくとよい。

初物は水神様に上げるつもりで川に投げこめ。

茶柱が立つのは良いしるしである。

閏年に墓石を立ててはならない。

大黒様には赤い花を上げるな。

死人の着物は三人で縫う。

人の股の下をくぐると丈が伸びない。

雉が鳴くと地震がある。

東側に便所を建てると家はつぶれる。

東北に分家を建てると本家はつぶれる。

傘をころがしながら歩くとばかになる。

人が溺れて死ぬのはカップにとられたのである。

葬式の時霊前に供えたご飯は棺といっしょに墓に埋めよ。

にわとりは四羽又は八羽飼ってはならない。

六という字はロクでなしだから悪い字である。

葬式に履いて行つた草履をそのまま履いて神社参りをする
とけがをする。

女が木に登るとその木は大きくならない。

女が遊びに来るとその日は客が絶えない。

二人の子供のお祝いを一語にすると一方が死ぬ。

元旦の夜富士、鷹、茄子の夢を見るとその年は運がよい。

牛に追われる夢を見るとよいことがある。

牛の角で突かれる夢はよい。

夜明け前に見た夢は当たるが、それ以外の夢はさかゆめで

ある。

人が死んだ夢を見ると子供が生まれ、子が生まれた夢は人

が死ぬ。

火事の夢を見ると酒宴あり、酒宴の夢を見ると火事がある。

梨や柿が沢山実った年は大風がある

箒星が出たら戦争が起こる。

六 暦の知識

1 十干と十二支（えとのはなし）
子・丑・寅……十二支は年賀状の季節になると、さか

んに活躍する。あなたは何年、と遠まわしに年齢をたずねたりする時にも利用されるように、年をあらわす言葉として知られている。しかし、そればかりではなく、時刻や方角をあらわす場合にも使われていた。例えば「草木もねむる丑三時」といえば、丑の刻を四等分した第三番目の時、つまり午前三時から三時半を指し、「正午」といえば午の刻の中心、つまり昼の十二時を指すわけである。「子午線」は、子（北）と午（南）を結んで頭上を通る線であり、「都の巽鹿ぞすむ」の巽は、辰と巳の間の方角、つまり東南を指す。

ところで、「ひのえうま」のように、十二支の「午」の上に「丙」などという語が加えられた表現を聞くことがある。このひのえというのは、甲・乙・丙……と続く十干の第三番目で、おなじ午年の人でも、昭和五十三年生まれならば戊午、ひとまわりさかのぼった昭和四十一年が丙午、そして二十九年が甲午というように、十干と十二支を組み合わせて呼ぶのが正式だった。十干と十二支を組み合わせると、六〇通りの組み合わせができる。そこで、六一年目に生まれた年と同じ組み合わせがめぐってくるわけで、これが還暦である。

年ばかりでなく、日も何日というかわりに十干・十二支の組み合わせであらわした。しかし、この数え方はやっかいなことなので干支順位表というのができている。

十干

甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
きのえ	きのと	ひのえ	ひのと	つちのえ	つちのと	かろ	かのと	みずのえ	みずのと

兄弟
木の
兄弟
火の
兄弟
土の
兄弟
金の
兄弟
水の

十二支

子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

十干と十二支の組み合わせ

十干と十二支を順に組み合わせていくわけであるが、第一は甲・子、第二は乙・丑、と組み合わせると、第十が癸・酉で、十干の方は終わってしまう。すると、十干は頭の甲にもどって甲戌、乙亥。そして、こんどは十二支が頭の子にもどって丙子と続く。

第1章 風俗・風習

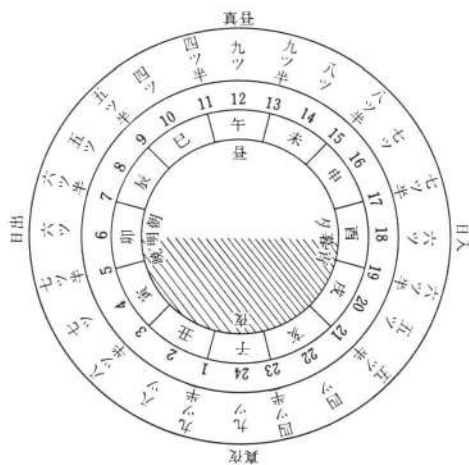
干支年代表

甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未	甲申	乙酉
寛永元年	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	正保二年	
和曆																					
丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳	甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯	甲辰	乙巳	丙午	丁未
正保三年	四	元	二	三	四	元	承応二年	三	明暦元年	二	三	万治元年	二	三	寛文元年	二	三	四	五	六	七
和曆																					
戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬子	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳
寛文八年	九	一〇	一一	一二	延宝元年	二	三	四	五	六	七	八	元和元年	二	三	貞享元年	二	三	四	元禄二年	
和曆																					
庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未	甲申	乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯
元禄三年	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	宝永元年	二	三	四	五	六	七	正徳元年
和曆																					
壬辰	癸巳	甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯	甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬子	癸丑
正徳二年	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	享保元年	二	三	四	五
和曆																					
甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌	乙亥
享保九年	一〇	元	二	三	四	五	六	七	八	九	寛保元年	二	三	延享元年	二	三	四	寛延元年	二	三	宝暦元年
和曆																					

戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	干支									
安永												明和				宝曆						和										
七	六	五	四	三	二	元年	八	七	六	五	四	三	二	元年	一	二	一	〇	九	八	七	六	曆									
辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	干支									
享和												寛政				天明						安永	和									
一	二	一	〇	九	八	七	六	五	四	三	二	元年	八	七	六	五	四	三	二	元年	九	八	曆									
甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥	壬戌	干支									
文政												文化				享和						和										
七	六	五	四	三	二	元年	一	四	三	二	一	〇	九	八	七	六	五	四	三	二	元年	三	二	曆								
丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	干支									
弘化												天保				文政						和										
四	三	二	元年	一	四	三	二	一	〇	九	八	七	六	五	四	三	二	元年	一	二	一	〇	九	曆								
庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	干支									
明治												慶応				元治				文久				安政				嘉永				和
三	二	元年	三	二	元年	三	二	元年	六	五	四	三	二	元年	六	五	四	三	二	元年	三	二	元年	曆								
癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	干支									
明治																					和											
二	六	一	五	一	四	一	三	一	二	〇	一	九	一	八	一	七	一	六	一	五	一	四	曆									

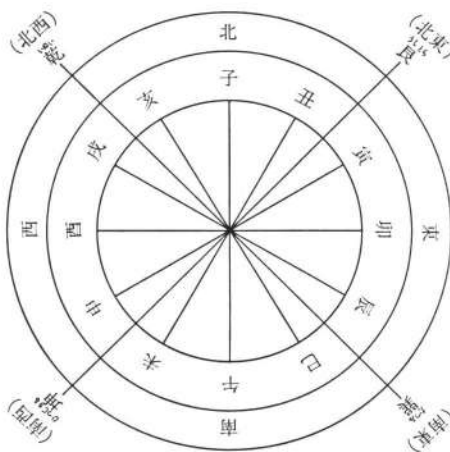
甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯	甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌
明治二七年	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三
辛亥	壬子	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥	甲子	乙丑	丙寅	丁卯
明治四四年	大正元年	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	昭和元年	二
戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未	甲申
昭和三年	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九
乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳	甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑
昭和二〇年	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六
壬寅	癸卯	甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬子	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午
昭和三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五三
己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未				
昭和五四年	五五	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	平成元年	二	三				

十二支であらわす時刻



(外側から十二刻・二十四時・十二支刻)

十二支であらわす方角



第1章 風俗・風習

例えば、西暦1978年の干支を算出する場合、干支の基本数は10と12であるから、 $1978 \div 10$ と $1978 \div 12$ の2つの式をたて、その余った数を右の表にあてはめれば、簡単に算出できる。

$$1978 \div 10 = 197 + 8$$

=
↓
戊

$$1978 \div 12 = 164 + 10$$

=
↓
午

したがって、西暦1978年の干支は戊午となる。

また、西暦2000年は、

$$2000 \div 10 = 200 + 0$$

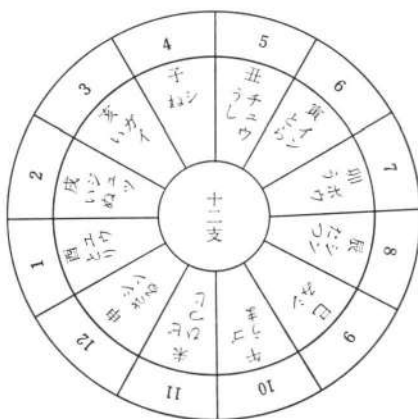
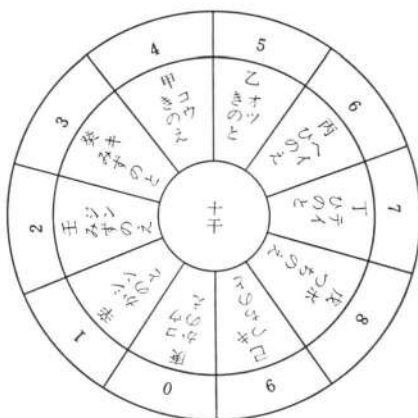
=
↓
庚

$$2000 \div 12 = 166 + 8$$

=
↓
辰

であるから庚辰となる。

西暦から干支を算出する方法



2 六 曜 表

日ごろ無頓着な生活をしていても、慶事・仏事となる
と、改めて大安とか友引とかが問題にされる。これは六
曜星と呼ばれるもので、古くはいろいろな表現があった
が、今日では次のように定まっている。

6 赤 口	5 大 安	4 仏 滅	3 先 負	2 友 引	1 先 勝
しゃつく・しゃつ こう・じゃつこう	だいあん・たいあ ん	ぶつめつ	せんぶ・せんまけ・ せんぶ	ともびき	せんしょう・せん かち・せんかつ
万事に凶、特に大工にきらわ れるという。	すべてのことに吉という。	万事に凶、何事にも手を出さ ないがほうがいいという。	午後が吉、急用や訴訟を、自 分から始めるのはよくないとい う。	何事も引き分け。葬式をする と、一緒にだれかを死の世界 につれていくという。	午前が吉、自分から事を始め れば吉、急ぎの事や訴訟に適 するという。

六 曜 星 早 見 表

旧 暦 の 月	旧 暦 の 日	1	2	3	4	5	6
		7	8	9	10	11	12
		13	14	15	16	17	18
		19	20	21	22	23	24
		25	26	27	28	29	30
		31					
1、7月		先 勝	友 引	先 負	仏 滅	大 安	赤 口
2、8月		友 引	先 負	仏 滅	大 安	赤 口	先 勝
3、9月		先 負	仏 滅	大 安	赤 口	先 勝	友 引
4、10月		仏 滅	大 安	赤 口	先 勝	友 引	先 負
5、11月		大 安	赤 口	先 勝	友 引	先 負	仏 滅
6、12月		赤 口	先 勝	友 引	先 負	仏 滅	大 安

(注) 六曜星は、旧暦の何月何日は何、と決まっているか
ら、何かの時、いちいちその年のこよみをさがさなくて
も、この早見表で間に合うわけである。

3 二十四節気

一年の長さを二四に分け、それぞれその季節にふさわしい名称をつけたもので、時候のあいさつなどによく利用される。

夏				春				四季
夏	芒	小	立	穀	清	春	雨	立
至	種	満	夏	雨	明	分	水	春
六月二十一日	六月 六日	五月二十一日	五月 六日	四月 二十日	四月 五日	三月二十一日	二月 十九日	二月 四日
一年のうち最も昼の長い時期(梅雨の盛り)	穀物の種まきの時節、田植えの時	万物、実が育ちはじめて満つる。	夏の気が立ちはじめの時期。夏の初め。	百穀春雨、農作物が盛んに生長する。	春さきの清浄明潔な感(お花見の最高潮)	昼夜の時間が等しくなり、これからは昼が長くなる。	冬眠していた虫が、地下からはい出してくる。	節分の翌日。冬と春の分かれめに当たる。

冬				秋				
大	小	冬	立	霜	寒	秋	白	立
寒	寒	至	雪	降	露	分	露	秋
一月 二十日	一月 五日	十二月二十二日	十二月 七日	十一月二十二日	十一月 七日	九月二十三日	八月二十三日	八月 八日
寒さの絶頂期雪も氷も厳しい。	寒気いよいよ深まる。	一年のうち夜が最も長い時期	雪がひどくなるころ	寒さはほどほどで、雪もまばら	冬めいた気配を感じる。	昼夜の時間が等しくなり、これからは夜が長くなる。	暑さのやむ時	暑さのやむ時

第二章 伝承芸能

一 太鼓踊り

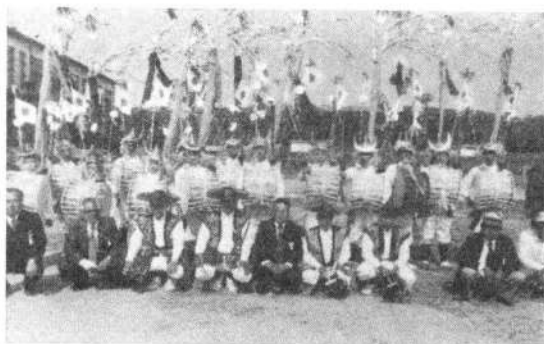
太鼓踊りの起源は慶長のころといわれている。島津義弘が朝鮮に出陣し泗川しせんの戦いの時、味方の軍勢の勢力を見せるため多くの旗指物はたさしものを押し立てて、鐘かね、太鼓を打ち鳴らして勝因をつくったのが、起因であるといわれている。しかし、関ヶ原の戦いの後、義弘が江戸に伺候した時、コレラが大流行して、江戸の人たちのあらゆる努力も空しく悲惨な有り様であった。この時、太鼓踊りをし神に祈ったところが不思議にも、猛威を振るっていたコレラがびたりと止まった。これを見た義弘は朝鮮凱旋がいせん記念の意味も含めて、家臣の山田郷の住人池田千兵衛と加治木岩原の牧之瀬某の両名に命じて、この踊りの服装、歌、踊り方を調査習得させて帰らせたともいう。

ところが、勇壮でしかも珍しいこの踊りはたちまち各所に伝わり、盛んに踊られるようになった。

この踊りも時代とともに盛衰があり、長い間踊らないので歌詞を忘れたり、踊り方を忘れたりしたので隣の集落や加治木の西別府辺りまで聞きに行くが、真実を教えたくない。そこで、作り上げたため多少の相違がある。

太鼓踊りは百姓の踊りといわれているが、踊りの隊形、及び踊り子の服装にしても武士階級らしいところがある。踊りの隊形の馬場上げは進軍の形であり、庭踊りは包囲に移るかまえであり、馬攻めは包囲完了の形である。このように戦いの踊りであるが、慶福行事や雨乞いの祈願にも踊られた。また盛夏のころ、水神や祖先の慰霊のため、稲の虫や大水の害をのがれるためにも踊られた。夏・秋のお祭り、諸祝典には踊りを奉納するのを常とした。七月の盆には町内各六か村は各々精練された太鼓踊りが麓地区で競演して非常にぎわいを見せた。今はただ特別な行事のほかに踊らない。

現在町内には万膳、三体の二団体があるだけで、各後援会をつくって存続を願っている。



三体太鼓踊り

(一) 三体太鼓踊り

三体校区の太鼓踊りは、今から約七〇年前の明治の末ころ、校区の先輩たちが、勇壮活発な加治木の太鼓踊りを見て、これを持ち帰り校区に広めたものと聞く。当時は車もなく、徒歩か馬が唯一の交通機関であったから、

恐らく歩いて加治木まで行ったものと思われるが、このような複雑な踊りを一回くらいで覚えるはずはなく、何回も往復したであろうと思われる。

このように苦労して習得した太鼓踊りも、途中日中戦争、太平洋戦争と大きな国事に

よって途切れてしまったが、終戦後復活し、昭和三十四年、三体小学校の校舎落成式に踊った。しかし、この時を最後に、再び途切れてしまった。

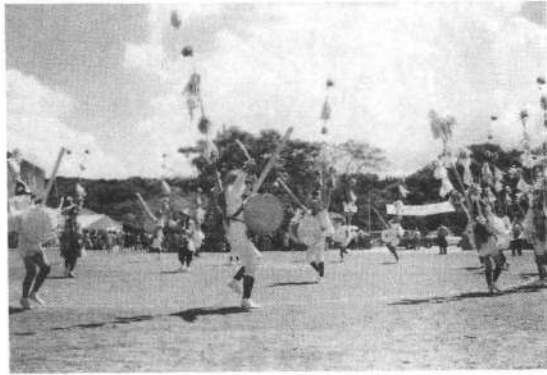
たまたま、昭和五十二年に、校区公民館活動が始まり、農村振興運動の拠点に校区が指定されたのを機会に、古老や有志たちが、三体に眠っている太鼓踊りを再度復活させようと立ち上がり、校区内各戸に寄附金を呼びかけ、太鼓や鐘を購入し、その間いろいろな苦難を経て、ついに復活した。そして、第一回の披露踊りを三体小学校屋内体育館落成式で行い、その後、町民祭、敬老会、三体生活改善センター落成式、六十年の敬老の日などで踊りを披露し今日に至っている。

踊りの構成人員は、鐘六人、太鼓一六人で、太鼓の中には、中学生が六人もいる。

(二) 万膳太鼓踊り

明治二十年ころから始まったと古老の話にある。

島津義弘の凱旋祝い、また、その供養のために、踊り始めたともいわれている。昭和十五、六年ころまで、毎年盆や、干ばつの折、あるいは神社祭典、大きな行事の



万膳太鼓踊り

は踊り子も少なく、また装備にしても昔よりも貧弱である。そこで後援会を結成して、踊り子募集、基金募集に努力している。

現在は町の行事や霧島競馬、町民祭、敬老会、温泉まつり、万膳小学校落成式などに出演している。

太鼓踊りは盛夏のころ、水神や、祖先の霊を祭り慰め

時には必ず踊りを披露していたが、太平洋戦争以来中断していた。それを昭和二十三年に復活した。

昔は非常に盛んに踊られて、前記の町の競演の際は異彩を放っていたが、現在

るため、又は稲の虫や、大水の害をのがれるものであった。

(三) 太鼓踊りの形式 (万膳、三体同じ)

(1) 人数——鐘打ち 四人

太鼓打ち 一六人
ホタ振り 二人

(2) 服装——鐘打ち 陣笠 陣羽織 白じゅばん
白足袋 わらじ 黒ズボン

太鼓打ち かぶと 白法被 帯 白ず

ぼん きゃはん 白足袋

(3) 用具——鐘打ち 鐘打ち棒 大刀 鐘

太鼓打ち 太鼓 矢旗 刀

(4) 隊形 (次ページ図参照)

(5) 唄

初て庭 。細川どのの召したる笠は

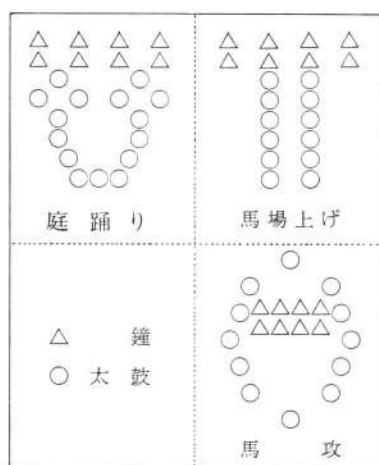
石あみ笠に花かたびらよ

。松は小松のその下に

さまとねるよにその下に

。細川どのの広間を見れば

太鼓踊りの隊形



中庭

末庭

白木の弓にとび木のそやよ
かめまつ殿はだて者でござる
けさゆたかみをばらりとときやる
稚児の下緒とわが帯と
結び合せて玉禪
稚児のあいづと尺八は
夜々吹けどもよりもせぬ
笠をわすれたするがの茶屋で
空がくもれば思い出す
。おおさて実盛どのこそは
びんひげそめて城に立つ

返庭

。青田の中で軍めす
そのとむらいに踊ゆるる
霧島山にかかりし雲は
けさ降る雨か夕立雲か
。向の土手に鳴くすず虫は
暑さに鳴くか涼しさに鳴くか

二 九面太鼓

沿革

昭和四十七年、霧島温泉商工会青年部の若者たちが、霧島温泉に郷土芸能をつくろうと考え、霧島神宮に伝わる九つの面、いわゆる天孫降臨の神々に天降りの打法、演舞など基本的な所作を振り付け、霊峰霧島にちなんだ天孫降臨の神話として創作したものである。

歌詞

その昔、アマテラスの命により、霧島神宮の御祭神（アメニギシクニニギシ、アマツヒタカ、ヒコホノニギノミコト）が国ツ神サルタヒコの道案内を得て、霧島山高千穂峯に天降られた光景を霧島温泉の若者たちが、そ

の神話と伝説を後世に伝え残しているものである。

構成

人数 一〇人 服装（白・薄紫の装束、面、袴）

用具

品名	数量	品名	数量
大太鼓	一個	ステージカー幌用補助レール	二本
太鼓（二尺一尺二寸）	九個	演奏用ハッピーカーテン	三〇枚
神楽笛	二本	演奏用尺八	三枚
法螺貝	二九個	マイクローバス	一本
神楽鈴	一個	四尺平太鼓	一台
太鼓台一式	九個	補助台	一個
大太鼓カバー	一枚	カパー	一枚
かがり火用鉄籠	一〇台	ステージカー	一台
照明機一式	一式	練習場	
大太鼓補助台	一個		

天孫降臨霧島九面太鼓の神

（天孫）天津日高能邇邇芸命

（五伴緒）天兒屋根命・布刀玉命・天宇受売命・伊斯許

理度売命・玉祖命

（二武神）



天孫降臨霧島九面太鼓

三棒踊り

鹿児島県では見なれた棒踊り。六尺棒と三尺棒で、ハ

（国津神）

天忍日命・天

津久米命

猿田毘古神



棒 踊 り

ッシと綾に打ち合いながら踊る一団の踊りは、闘魂そのもの。気迫に満ちた立ち合いで、激しい息づかいがじかに伝わる。りりしい白い鉢巻きに、襷掛け、白足袋、草鞋の肢体も軽く、素朴な歌にのって躍動しながら、常に端正な姿勢をとるのは芸能といっても、武技の入るせいでもあろう。宙を切る棒の走り、その上げ下ろし、受け止め、肩に背負い腰で払うなど、鮮やかな棒芸は、一定の型でなしに、極めて自然な流れの律動をつくっている。したがって、見る人を、集団の美しい棒さばきに引き込んで、魅了せずにはおかない。勇壮活達なこの

踊りは、いかにも薩摩らしい武の国の風土になじんだ伝承の踊りである。

棒には、どこか神と人間と自然との交渉が息づいているように思われる。だから、棒は単なる武器ではなく、一種の呪力として、これを打ち合わせることによって悪霊や悪魔の退散がはかれる不思議な力がこもっている。それで田植えや農耕神事の時、この踊りが奉納されるのは、悪魔を払って豊作を求める生産につながるものがあるからだろう。

起源は伊勢大神宮の御田植え祭で、田植えをする者を慰めるためのものであったようである。薩藩の富国強兵策の一つとして、農村の青年たちの忠誠心と尚武の精神の養成に役立ったものであったろうが、これは神社と農民との結びつきで生まれたものであろう。町内では、昔は各大字にあって、神社の祭典の時によく奉納されたものであったが、現在は三体堂宇都口、上中津川横瀬、改田口、持松二区の団体がある。

改田口の棒踊りは、伊邪那岐神社ご遷座四百年記念祭が昭和六十年三月二十四日に行われ、一三年ぶりの復活。三体堂宇都口の棒踊りは、昭和五十五年に生活改善セン

ターの落成式があったさい力強く演技されている。持松二区の棒踊りは、昭和五十六年、校区公民館の落成式に三〇年ぶりに披露されている。そして、横瀬棒踊り保存会は、昭和五十七年の多目的営農研修施設の落成式に三〇年ぶりに披露されている。

四 ザツ踊り（座頭踊り）

上中津川健崎集落には、昔からザツ踊りという、こっけいな踊りが伝承されている。古老の話によると、この踊りは明治の中期ころから健崎集落で行われていたらしく、一時途絶していたものを、昭和二十二年に復活、その後再び途絶した。しかし、昭和五十三年の中津川小学校百周年記念を機に復活したものであるという。

踊りの構成

人数 踊り役 女役二人、男役七人、三味線一人、太鼓一人、鐘一人、拍子木一人、合計一三人。

服装とあらずじ

1 女役二人出て踊る。服装、長襦袢・扇子（日の



ザツ踊り

丸）・日傘（竹骨でつくった小さい傘）。一人は長刀、一人は鎖鎌を持つ。

2 次に商人（酒屋）出場。ズボン下・法被・赤帯、畚をかつぎ、手に扇子（日の丸）を持つ。

3 三番目に覆面（黒い布）の武士が出场。黒い着物・袴、黒い足袋・雪駄ばき。

4 四番目に盲人出场（伊勢参りの盲人）。

三番目出場の覆面の武士に金を奪われ、盲人はすごすごと帰りにつく。

5 五番目に黒い着物の武士が出场。覆面の武士から金を取り返し盲

人に渡す。

6 盲人二人出場。一人は琵琶を持ち、一人は銭車（五厘銭を竹につないだ物）を持つ。ズボン下・黒足袋・草鞋・竹杖・竹の眼鏡・頬かむりの服装。二人、関所にさしかかり番人と共に踊り出す。そこに武士が現れるが、この武士は、前記女二人が探し求めていた仇敵とわかり、こゝでめでたく仇討ちをする、という筋書きの踊りである。

踊りの中にユーモアがあり、思わず爆笑する。持松校区にもこの踊りが伝承されている。

五 茅の輪くぐり

神前で厄払い祈願をした後、皆が持ち寄った茅で、直径二メートルほどの輪を拝殿と神殿を結ぶ柱と桁に固定して作り、教え年七つの子らをくぐらせるとすっかり厄は除かれるという。これで子供たちの健やかな成長まちがいなしということ。茅がやには悪霊を払う霊力があり、これを輪にした茅の輪をくぐることで身の清浄が保障される、と信じられているのだ。このような行事は町

内の神社も行っている。

陰暦六月の晦日に行う祓いを「名越の祓い」、また、鹿児島では「ナゴッサア」と呼び名越祭とか夏越祭ともいう。伊邪那岐神社では、月後れの七月二十九日、茅の輪くぐりや人形（ひとがた）流しなど古式ゆかしく行われる。神事が終わると、神官から七つ子全員に紙で切った手のひら大の白い人形が配られる。この人形で、まず、自分の左右の肩、次に鼻から全身をなでる。最後に目をとじ、この人形にフーッと息を三回吹きかける。これを神官が集めて回る。この半年間、体内に宿った罪や穢れを人形に託し、川に流すお祭りである。

次に茅の輪くぐりの時、神官が吟ずる古歌であるが、「水無月の名越の祓いする人は 千歳の命延ぶというなり」などと吟ずる。最後に七つ子らは麻でつむいだ「長寿の衣」を一人ひとり肩にかけてもらい、「洗い清められた、すがすがしい気持ちで暑い夏を無事乗り切ってください」と祝福を受ける。名越の語義は、邪神を祓いなこめる意味で「和し」だとも、夏の名を越えて相剋の災いを祓う故ともいわれる。旧暦六月は梅雨時で悪疫の流行期であり、健康保持のため罪、穢れを祓う必要があったの

だろう。

六 稲造踊り

三体堂の飯富神社で三月、五穀豊穡^{ほろじょう}を祈願する、ユーモラスなお田植え祭が行われる。祭りの呼び物はなんと



稲 造 踊 り

いっても農耕劇で、人気のある稲造踊りである。テチヨウ(百姓の親父)・稲造(息子)・あはれ牛たちが面白おかしい会話や滑稽^{こっけい}なしぐさで動きまわる寸劇である。

七 町内で歌われている代表的な歌

1 大津絵節

はるばると、長の旅、わが土地離れて、親子づれ、道も、はかゆかぬ、女の旅なれば、富士のけしきは、初雪の、いるふるそでは、むすめざかり、かようおかるは、御代の町、小波が心はいそいそと、旅の思いを、ふみわけて、母親が夫のたましいを、もろこしに、いきてものにて、旅をする、山科さしてぞ、いそぎ行く

2 ヤッサ節

ヤッサ節なら、しゆたこつづれ(尻高く)前のムタ田が腰かかる

ヤッサ床取れ、枕はいらぬ

たがいちがいの腕まくら

3 すもう取節

すもはすんだすんだ すもとやもどせ
後に残るは、土ひゆ(俵)ばかり

4 おはら節

見えた見えたよ、松原ごしに
丸に十の字の帆が見えた

花はきりしま煙草は国分

もえて上るは、さくらじま

雨の降る夜は、おじやすなとゆたどん

ぬれておじやれば、むぞござる

雨の降らんのに、草牟田川にごる

伊敷原良の、けしよの水

デコン（大根）ばたけで、げんねこつしやんな

人が見ちよつど、われもんど

月のちよいと出を、夜明けかともて

さまを帰して、気にかかる

かわいそうだよ、白歯で身もちや

親のゆだんが、今見えた

5 ハンヤ節

ハンヤハンヤで半年しや暮れた

後の半年しや寝てくらす

ハンヤハンヤで今朝出た船は

どこの港に着いたやら

「今来た、にせどんよかにせどん

相談かけたら、ハッチコソナにせどん」

6 神舞の歌

。きりしま

(1) 霧島はいくせの神のおわすれば

これがきりしまと申すなり

(2) 霧島をながむれば

霧か霞かかすかに見ゆる

(3) 霧島はいざなぎいざなみのみこともちて

天のさかほこさしおろし

。たちからをのみこと

(1) 神のまま神のみちをふむときは

向うあくまもば——らとちる

(2) われこれ手力男のみこととは、わがことなり

やいての神は十万五千人の力をえたる神なれば

われこそ十万八千人の力をえたる神なれば

天の岩戸をさくさんにひきやぶり

おしやぶりよもも正きよもおがません

7 四方立歌

(1) 春三月やなぎさくらに ふちの花

うぐいす きぎすひばり めをなく

おおこれも東方は むとくの神と

げんしてさうらう

いかであくまや来るべき

(2) 夏三月うづきうのはなぢうきたつ

朝かりがねに うづらみよなく
 おおこれも東方は かとくの神と
 げんしてさうらう
 いかであくまや来るべき

8 十五夜に歌う二才（青年）歌

- (1) 橋の下からうの鳥がえぶなくわえて飛ぶ心
 イヅレオキニハ
- (2) 様は涼しのすみ小袖ひとり心のうらみしや
 イヅレオキニハ
- (3) 今宵ばかりのうで枕あすは舟路のかちまくら
 イヅレオキニハ

9 霧島小唄

- (1) 春よ春々 霧島山の 峰にやかすみの薄衣
 裾の三里は山桜 天の逆鉾逆鉾さ
- (2) 春の霧島なつかしや
 夏よ夏々 霧島山のつつじや真盛りどの山も
 香る新緑夏知らず 天の逆鉾逆鉾さ
- (3) 夏の霧島なつかしや
 秋よ秋々 霧島山の すすきやなよ誰まねく
 夕日火の山紅葉燃ゆ 天の逆鉾逆鉾さ
- 秋の霧島なつかしや

- (4) 冬よ冬々 霧島山の 峰にやつららの雪の花
 麓栄之尾の湯の香り 天の逆鉾逆鉾さ
 冬の霧島なつかしや

第三章 民話と田の神信仰

町内には、古くから語り伝えられてきた物語、伝説、評伝など、さまざまな話題性に富んだ話がある。なかには、孝子表彰といった実話や習俗もあるが、ここでは、便宜上、民話として、ひとくくりにして紹介する。

一 大浪池の由来

今は昔、この池のふもと、三体堂に金持ちの庄屋がいた。何一つ不足はないが、四〇の坂を越えるのに子宝に恵まれないのが寂しい限りであった。ある時庄屋が、山の池の辺りに行くと、一人の美しい娘が石の上で遊んでいた。庄屋はこんな山の中でどうして女の子が一人で居るのかと見とれてみると、こつぜんと姿を消してしまった。不思議に思つて帰つてその話をすると、妻は、そんな女の子がほしいと言ひ出した。それからというもの毎日その山の池に娘を探しに行ったが見当たらないので、

岸辺に立つて神々に子供を賜れかしと熱心に祈つた。程なく妻は身重になつて産んだのが女の子であつた。庄屋夫婦の喜びは大変なものであつた。名もお浪とつけて、蝶よ花よとかわいがつて育てていくと、その女の子は、庄屋が池のほとりで見た女の子と瓜二つの顔貌となつた。

月日は流れて早くも一八の春が訪れた。諸処の有力な庄屋から結婚の申し込みが殺到したが、一人娘のため婿養子でなければならぬ。数多くの若者の中から選ばれて、田口村のある豪農の息子に白羽の矢が立った。しかし、お浪は一向に顔をたてに振らないばかりか、その話を聞かされるたびに、寂しく笑うのみであつたが、ついに重い病氣の枕についてしまった。

庄屋夫婦の驚きはいかばかりか。医者よ薬よとさわいだが効きめがあらばこそ、美しかった姿形は今は見るとげもなくやせ細つてしまった。ある夜のこと、娘は急に山の奥に行つて見たいと言ひ出した。庄屋夫婦はもちろんのこと、親類もとんでもないことと、この申し出をとめたが一向に聞き入れてくれない。泣く子と地頭には勝てぬと、ついに庄屋夫婦は娘の乞うがままに山奥に月光を浴びながら登つて行つた。程なく池のほとりに来た。

娘は父のすきを見てザンブと池の中に飛び込んでしまった。庄屋は氣も狂わんばかりに「お浪、お浪」、悲痛な叫びをあげたが、対岸の岩壁にこだまするばかりであった。

庄屋は泣き叫びながら夜を明かした。太陽はきらきらと池の面を照らしたが、お浪はとうとう二度と姿を見せなかった。お浪はこの池に住む龍王の化身であった。庄屋夫婦の切ない願いに感応してしばらくの間、庄屋の娘となっていたのである。以来、この池の名を「お浪の池」と呼ぶようになったが、いつのまにか大浪の池となってしまった。

庄屋夫婦はついに病床の人となってしまうが、病床にあってもいつも「お浪、お浪」と呼びつづけたので、人々はこの庄屋を床なみさんというようになった。今も三体堂田方に床波という家があるが、その子孫ではないかといわれている。「床次」「床浪」の姓もここに発したのだと思う。

二 聖神社の由来記

今から約二〇〇年前（明和年間）下中津川村の庄屋高木家だけに井戸があった。付近の女衆はいつも集まって井戸端会議をやっていた。そこに高野山から霧島神宮に



墓 の 原 の 聖

参拝に来た高野聖（やまじり）が通りかかった。彼は大変青色のよい赤銅（あかがね）のリンを持っていた。そのリンを見た下中津川の唐仁原家の子供が、ほしがり、離さなかった。やむなくそのリンを売ってく

れと頼んだが、断られた。ついに争いとなり、聖は相手を負傷させて逃げた。そこで高木・田島・唐仁原の三家から追っ手がかかり、約六キロメートル離れた持松の聖原まで追いかけてこれを殺した。聖原の墓には慰霊塔も建てられている。

当時の霧島神宮参拝コースは犬飼―田代―横瀬―聖原―六方辻―伊勢谷―神宮であった。

この聖は高僧であつたので、たたりを恐れて神社を上中津川横瀬板小屋、通称宮跡に時の領主伊集院十右衛門久房によって明和七年（一七七〇）十月十二日建立し、更に大正十五年に現在地に移された。

神社に伝わる板面の表には次のように記されている。

明和七庚寅十月十二日

今上皇帝聖寿無窮

奉恭建立御殿内迄惣開

天下泰平国土安穩

須弥之高無不蓋国斯天之徳也大海之広無不事者斯

地之徳也品類之衆無下惠者斯人之徳也而其人其之無

不仰崇者蓋維神明乎越於隅易踊郷横瀬仙宮大明神

者乃当邑之領主伊集院十右衛門久房恭創建霊社其

殿略以円備広其末端者鳥居也豈非為閑耶故当邑之士氣信男信女發厚志願以与補焉而訟於達上主主亦機相投即許之安堵成啐喙同時之再平所請焉有徳之驗者也嗚呼可尚哉茲歲既具至明和七庚寅秋新造功成耳遂墨寿記永留宮室以備万古靈驗者也所願天長地久人民歡娛国弘祭紂災殃備与歌唐靈取五代百怪早消滅千祥急大来專冀大櫓越伊集院十右エ門藤原久房武運益長徳沢弥広賢子賢孫遂日連統新威臣士陸時繁昌寿国縁国永保嘉齡門与隆大富金穀今善根深厚即後利徳広大国吏者倡日国不蔓不枝無等匹厚然独露一天地風磨馬洗機千回世界壤口口不朽願主各敬白

裏は判読できないが、寄附者名らしい。

また、大正年間現在の所に移築したのであるが、板面には次のように記されている。

表――奉祀聖神社拝殿新築

大正十五年八月十日 着手

全 八月二十日 棟木揚げ

全 九月廿二日 落成

全 九月廿四日 彼岸中日落成式

裏――拝殿改築並に其の部落

工事委員	本村次助	通山東一	永田鹿右衛門
大工	湯窪源左衛門		
	深町秀司		
区会議員	會長 通山東一		
	副會長 竹下金助	本村次郎	
	永吉牛太郎	荒瀬袈裟助	
	永田鹿右エ門	湯窪源左エ門	
	末広直一	上村甚兵衛	
区長	馬場甚袈裟	改元伊右エ門	
	通山仁八	笠山畠次郎	
氏子総代	通山末太郎		
村会議員	板越信輔	野元八之進	
牧園村長	富田重治		
神主	橋本熊夫郎		
工事費	青年貯金 貳百円		
	区貯金 壹百廿円		
	他寄附		
総計	六百五十拾円		

三 新湯の由来記

(1) 新湯の発見

明治十二年六月上旬、桑原郡踊郷下中津川荒田の素封家田島源八氏（西南戦役従軍、後郡会議員）が、青年たちを伴い御岳参り（霧島神宮古宮跡）をした折、高千穂河原付近にワラトビ（小積みの上に載せる雨覆い）をかぶった異様な男がいたので、好奇心から色々尋ねたところ、四国から来ている高窪豊造というハンセン氏病患者で、二日間「おこもり」をしているとのことであった。青年たちは携帯している握り飯を与えようとしたが、断食祈願中とのことこれを拒絶した。

このことがあってから間もなく、高窪氏は夢の中に「ここから、西北の方一里ばかりの小川の中に砒素が燃えているから、その川を堰き止めてはいれ」とうれしいお告げがあった。高窪氏は大いに喜び、原始林を分けて、ようやく目指す鉱泉を探し当て、岩風呂をつくって入浴したところ、癩病は日増しに良くなり程なく全治した。これが新湯発見の始まりである。

このうわさが世間に広まり、伝え聞いた九州・四国方面の癩病患者が続々と集まり数年後には五、六百人に達した。このような由来から、この鉱泉を砒素燃湯又はコシキ湯と呼ぶようになった。

(ロ) 新湯の占領

新湯は国立公園内で大浪池南側の谷間にあるが、発見当時、付近一帯は人里離れた原始林で東襲山村（現国分市）の内であるか、踊郷であるかが、明瞭でなかった。新湯が発見されて数年たった明治十五、六年ころ税所篤（後正三位、子爵、霧島神宮宮司、枢密顧問官）翁が霧島神宮に参拝した折、時の霧島神宮宮司福崎季連から砒素燃湯の境界認定願書を受け取り、「これがうまくゆくよう県知事にとりなして頂きたい」との依頼を受けた。

税所翁はこれを承諾し、早速時の渡辺千秋知事に対し「先般発見された砒素燃湯は境界が未確定のようだが、東襲山村を流れる霧島川の上流にあるから、東襲山村内にあると認定していただきたい」との趣旨の願書を取り次いだ。明治の功臣で学識高い税所氏からの斡旋に動かされたのか、渡辺知事は調査もせずその場で認定してし

まった。

この決定を喜んだのは東襲山村民で、早速各戸に触れを出して沢山の村民たちが新湯に集まって、崖や斜面を削り四八棟の急造バラック小屋を建てた。

(ハ) 湯治小屋の破壊

このことを知った踊郷下中津川の人たちは非常に騒ぎ出した。「このまま見逃すわけにはいかない」ということで、当時東襲山村と下中津川村との境界が明瞭な縄引帳が残っていたので、これにより調査をすることにした。

東襲山村からは重久の川越親春戸長、踊郷からは永田定介（永田良幹の祖父）戸長が立ち会い検分したところ、本鉱泉は明らかに下中津川村内であると確認された。そこで下中津川村から県知事に境界の再調査を願い出たが、知事は既に認定済みであったので、「再調査の必要なし」と却下してしまった。

当時の下中津川村は寺原・轟木・母ヶ野・栗川・小谷龍石、すなわち現在の高千穂を含み合計一二集落、二六〇戸ばかりの世帯数であったが、再調査却下の報に激高した村民たちは一斉に立ち上がり、各戸から鉋一丁ずつ

持ち寄りながら、砒素燃湯に行き、四八棟の湯治小屋をたちまち切り崩してすべてを焼いてしまった。

(二) 破壊責任者の投獄

この事件は砒素燃湯に来ていた一湯治者から国分警察署に訴えられ、一二人の下中津川村の総代たちが罰せられた。犬飼の田島十次郎・高橋甚兵ヱ、田代の田島十郎太、荒田の岩元伝助、改田口の鶴ヶ野五兵ヱ、その他の人たちで各々懲役一か月を言い渡され、鹿児島監獄署に投ぜられた。しかし、獄内ではその取り扱いは大変寛大であった。

(三) 新湯の帰属逆転

一二人の総代たちが懲役を終えて出獄すると間もなく、東襲山村から破壊された砒素燃湯の湯治小屋四八棟分の損害賠償として、二〇〇〇円を下中津川に支払うように鹿児島裁判所に告訴された。

当時は、米一升三錢五厘の時代であったから二〇〇〇円は大金であった。総代たちは村の長老を交えて何回も鳩首協議したが、名案は浮かばない。ちょうどそのころ鹿児島市内に「踊郷指定旅館」をしていた、前原敬介という人がいた。この人は明治十年の役で西郷方の半隊

長をしていたが、戦傷を負い、下中津川村荒田の田島源八方に特設されていた野戦病院で世話になった関係もあって、この窮状を見かねて一肌ぬぐことになった。

この旅館に竹香という人が逗留していて、毎晩渡辺知事の宅を訪れて碁の相手をしていた。前原氏はこの竹香に策を授けて「新湯の境界は知事が調査もせずに東襲山村に認定されたとのことで、踊郷の人たちは大変いかって、大學して押しかけるとのうわさがあります。そうなれば知事さんの面目はつぶれるものではありませんか」と、有ること無いこととり交えて碁の合間合間に話した。渡辺知事は大変驚いて、「縄引帳」のとおり境界を訂正させたので、新湯は下中津川村の土地になった。

(四) 損害賠償の裁判

破壊された湯治小屋四八棟分の損害賠償として、二〇〇〇円を支払えという裁判は、前原氏が下中津川村に土地を持ち、下中津川村の住民の一人という資格で、一二人の総代たちの控えとして裁判所に出頭することになった。

裁判官から「下中津川村の総代たちに損害賠償金二〇〇〇円を支払うよう東襲山村から訴えられているがどう

するか」と問われたのに対して、控え席から前原氏が立ち上がり、「下中津川村の村民の一人として申し上げますが、四八棟分の家は全部元通り造って返します。二〇〇〇円もかかるものなら、定めし立派な設計書ができていましょう。その設計書を頂きたい。すなわち「どの山から何という木を何石伐採したか、牛何頭で運搬したか、木挽はだれか、大工はだれが何日かかったか、茅はどこで何駄切ったか、そういう資料によって元通りの家を造ってお返しします」と答えた。

裁判官は東襲山村に対して、「元通りこしらえて返すから設計書を出すように」と促したが、東襲山村ではここで大いに詰まった。大工は一人も使っていない。木挽も同様で、東襲山村の人たちが官山の木や茅を勝手に伐採して、縄やかずらで結び合わせている掘立小屋である。設計書などもちろんない。原告の方こそ困って、官林盗伐罪に問われる羽目になる、何とも返答できず、結局、損害賠償の申し立ては認められず、原告側の敗訴と決定された。ところで、昭和二十九年八月十八日、大きな地滑り（六万三〇〇〇立方メートル）があつて、九人の湯治客と共に四つの浴槽や自炊部屋、旅館部も埋没し

た。このような災害のため本鉱泉は、その後六年間休止の状態であつたが、同三十五年から浴槽、自炊部屋二棟一六室も復旧し、湯治客も漸次多くなっている。

四 愛宕神社の由来記

「抑々愛宕神社の由来を尋ねるに、往時島津藩政時代に於ては郷村には必ず一宇の愛宕神社あらざるはなし。蓋し祭神は火産神を崇め奉り、御神体は御銚鎮座す。千古の昔より軍神と称す。火の神と唱え亦荒神と云う」とある。

このように愛宕神社は武の神として参拝者は武運長久を祈願するだけで、例えば家内安全のような私事は願わないのが例であつた。そのほか女子は八歳に達すれば境内に入ることを許されなかつた。また、士分の者のほかはみだりに境内に立ち入ることを禁止されていた。昔日、事変の發生の時は愛宕山で一つ貝を吹き鳴らすと、二才衆はただちにはせ集まることになっていた。

明治維新の改革により旧来の制度が改まってから、愛宕神社の管理、祭祀は自然に衰微してついに屋根は落

ち、戸壁は破れ、ほとんど倒壊寸前であったので、一応隣の招魂碑の傍らに遷座し、長年たつてから旧の場所に仮宮を建てた。

これとて粗末なもので、わずかに雨露をしのぐ程度であり、古くからの参道は荒廃し、西南方の山道を回る程度のもので、だれ一人としてこれを顧みるものはない。昭和八年十月、時の宿窪田区長西重夫はあまりの神社の荒廃ぶりを残念がって、同志とはかり区有の補給金で一小宇を建てた。これがしばらく残されていた。

この神社の創建は記録がないので、はっきりしないが、古老の話によれば約三五〇年以前、慶長年代踊邑を外城とするに及んで建てられたものと推定される。愛宕神社のあった所は小高い丘で、三体堂からの道はこの丘をまわり牧園小学校の方に出たものであるが、明治四十三年、高千穂街道が開通するため、切り開かれた。それで愛宕神社と招魂碑は、昭和三十三年十月、今の公民館横に移転され跡地は整地されて、老人福祉センター、駐在所及び民間宅地となっている。

五 くまその洞穴

大むかし、大和朝廷がまだ全国統一できなかったころ、九州の薩摩にくまそという一族が勢力を持っていた。日本武尊が征伐にきましたが、くまそは強いので、なかなかうちとることができません。くまそが新宮殿の落成祝いをしているところに、娘の姿になって近づき、ようやくうちとったといいます。このくまそがひそんでいたという洞穴はいまの牧園町あたりにあったとい



くまその洞穴



小 碓 城 址

われ、塩浸というところに「くまその洞穴」がのこっています（椋鳩十著『日本の民話』から）。

（注）塩浸温泉から一〇〇メートルほど下方の川向かいにある。

六 小碓城（茶碓城）

正福寺裏手の小高い丘を茶碓城という。これは昔、川上梟帥が城とした所とされているが、この城に日本武尊がしのびこんで、梟帥の首をとったところから、日本武

尊のもとの名小碓尊からとって小碓城ともいわれる。丘の上には弓掛松という名木があつて、時々弦音を聞くということが村誌に見えている。現地を調査するために山に分け入ってみると、ヒノキの林は深く、背丈より高く繁茂した雑草の中に、「小碓城址」と昭和七年三月、牧園尋常高等小学校による碑がひそかに建っている。

七 祝 橋

正福寺から二〇〇メートルほど霧島寄りのところ、石坂川に架かっている橋を祝橋というが、これは日本武尊が川上梟帥を討って、勝利の祝宴を開いたところから、この橋の名が生まれたという。また、尊はその祝宴の席上余興に踊りをされたので、その辺りを踊りの里というようになり、それから踊郷の郷名が出たともいわれている。

城跡の東北高地に「カクンダン」というところがある。これは川上梟帥が兵をもって囲んでいたところから、カクンダンといわれるようになった、といわれている（『牧園村誌』参考）。

八 蛭のいない里

万膳集落は南北に小高い丘を巡らし中央を万膳川が流れている。清く澄み切って魚の泳ぐのもよく見える清流が流れている。昭和四十六年八月初旬の大洪水により堤防が流されて、濁流が水田に流れ込み、稲を押し流し、大きな石が土砂と共に転がり込んで、あたかも砂漠のようになった。その年河川工事が始まり、今は完全に整備されている。この川にスッポンが沢山生息しているが、里人は決して捕獲しない習慣が何百年も以前から続いている。このスッポンと、水田にウヨウヨしている蛭ひるに関する物語が今に残されている。

今は化学肥料の関係で蛭も少なくなっているが、昔は田に足を踏み入れるとどこからともなくウヨウヨと集まって来たものである。今もいることはいるが、決して吸いつかない。この蛭に関する挿話が古老により語り継がれている。

この万膳川のほぼ中央に八幡神社がある。創建は建仁年間、北条時政が鎌倉幕府の執権時代というから約八〇

〇年前で、祭神は応神天皇。当時万膳に居住していた源弘章が戦勝祈願のため、京都の石清水八幡宮かんじょうを勧請して当地に神社を創建した、と同神社の明細書に残されている。

いつの時代か判明しないが、同神社の御田植祭が盛んに行われた。神田に氏子の若い男女が集まって田植えが始まった。その早乙女さねめの中に、村一番の器量良しといわれた娘の太ももから血が流れているのを見た青年たちは、面白半分に、生理のあるのに神社の田植えに出るのは不届きである、穢けがれである、神罰を被ることは請け合いです、と寄ってたかつてののしり合った。乙女は顔を赤らめて、蛭に吸われて流れた血であると言いわけをしたが、青年たちはなおさら面白がってののしった。乙女は泣く泣く家に帰った。

この八幡神社の南東方に広い畑があつて、その片隅に何百年もの大きなナラの木が四方に枝を張って茂っていた。田植祭の翌日一農夫が畑仕事に出掛け、まず一服と、木の下に行くと、丁度手ごろな枝に首つり自殺をしている乙女を見つけた。びっくりしてよくよく見ると、昨日田植祭の折ののしられた少女であつた。農夫は

驚いて早速親たちに知らせ、集落の人たちや親族の人たちの計らいで野辺の送りをすませた。集落の人たちが話し合って慰霊祭が行われたが、席上において、今後万膳川流域の田には一匹の蛭もいないように、その代わりに八幡様のお使いといわれているスッポンは今後一切捕獲しないという誓いをたてて神社のお祭りをした。その後、万膳の田には一匹も蛭がいなくなつた。今も田植え時季に一匹か二匹の蛭を見ることがあるが、決して吸いつかない。他町村の人たちはそれを非常にうらやましがっている。

以上、蛭とスッポンの関係を述べたが、自殺した少女がどこの人か、名前も今は不明、また、何故万膳の田に蛭がいないか、この謎は解かれていない。

九 庚申さま

庚申の夜は持ちのよい嫁の髪

庚申をうるさくおもう新世帯

庚申のあくる日聞いて嫁こまり

庚申の夜に男女同衾することは禁忌だったので、こん

な川柳も生まれたのだらう。江戸時代までは、紀年をする場合には干支（えと）が用いられていた。干支とは、十干と十二支の組み合わせのことである。十干は、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸で、十一支は、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥で、両者を組み合わせると、甲子の年から癸亥の年まで六一年目に同じ干支が巡ってくるのと同様に、六一日目に同じ干支の目が巡ってくることになる。庚申は庚（かのえ）と申（さる）の組み合わせであつて、年に六回、多い年で七回になる。庚申信仰は庚申（かのえさる）の日の禁忌行事を中心とした信仰で、本来は、中国の道教の生み出した三尸説によるものとされている。

三尸という虫は、人間が生まれると同時に身体の中にいるものと考えられた。この三尸は日夜絶え間なく、その人の行動を監視している。そして、庚申の夜に人間が眠っている間に、そつと身体から抜け出して昇天し、天帝にその人の悪事を報告する。天帝はこれを知いて、その罪状によって、重い場合は生命を奪い、また、寿命を縮めるというのである。

したがって、三尸が身体から抜け出して昇天するのを

防ぐために、庚申の日は眠ることなく心身清浄にして、他念なく一心に祈念をすべきであるということになったのである。

庚申信仰が日本に伝わって、庚申の行事が行われたのは承和五年（八三八）のことであるが、当時は御庚申、御庚申御遊などと称して宮中や貴族社会に定着していた。中世になると、守庚申と称して武将たちが参加した。室町時代ともなると、上流社会ばかりでなく、一般庶民の間でも行われるようになった。庚申の信者人口が最も多く、最も盛んだったのは江戸時代である。庚申講はこの時代に始まった所が多く、庚申信仰の特徴の一つは庚申塔の造立である。

鹿児島県の庚申信仰はどうだろうか。県下の庚申塔は約四〇〇基で、九七パーセントは江戸時代造立のものである。このことは、この時代に庚申信仰が盛んに行われたことを物語っている。そして、時代が下るにつれて衰退していくが、現在でも庚申講は県下の各地で行われている。

県下の庚申講は、庚申を訓で、カノエサッドン、カノエサイコ、略してカノエコ、サッドン、カノエノカンサ

ーと呼んでいる地方（薩摩・大隅両半島）と、庚申を音で、コウシンコ、コウシンマチ、オコシン、オコシンサアと呼んでいる地方（県中部・北部一帯）とに分けられる。しかし、両地方とも信仰の内容は共通していて、県下全域にわたって、庚申は豊作を祈る神として作神化されていることに変わりはない。

ところが、作神化しない、いわば戒律的傾向の強い庚申講が最近まで、又は戦前まで存在していた。栗野町北方本村・小屋敷・出水市古市馬場・下大川内・阿久根市山下麓・大口市山野小川内の庚申講である。いずれも、二才教育の修養が目的で、日常の礼儀作法、風紀秩序の反省、集落の公役、農事にいたる生活全般の自治的性格をもつものであった。

熊本県球磨地方には約四〇〇基の庚申塔があつて、現在郡内の数か所で庚申講が行われている。そして「庚申の晩は人事言うな」「庚申日に出来た児は盗人になる」「庚申児は手が長い。頭が長い」「庚申に生まれた児は疑い深い」「庚申の夜には女によなべをさせるな」など特異な伝承を伴っている。庚申と女性との関係は深い。俗に「オコシンサアの餅のこちゃ」といわれるほど小さ

い餅は庚申講につきものである。牧園町万膳有村の集落は「コウシンサン」と呼んで年三回庚申講を行っている。

講の座には小餅が二個入った吸い物がだされ、帰り際には、別に小餅を各戸当たり二個ずつ渡される。講の参加者は男女を問わないことになっていて、女性も参合している。だが、この小餅は女性が食べてはいけないことになっていて、特に、未婚の女性が食べると、良い婿がみつからないといわれている。そのほか、庚申様は女嫌いだから、庚申講に女性は出席できないという所もある。三体堂中野集落では年二回行われている。庚申信仰伝播の経過や、どのようにして作神化したのか、その辺はわからない（『かこしま民俗探究』参考）。

十 竜 石

竜が想像上の産物ではなく、実在していると考えられていた時代の話である。いま高千穂のプリンスホテルの下に展開している山、すっかり人工林に覆われ、所在もわからなくなっているが、そのころは一面のスロープ、

一面の草原の中に、そびえるようにはっきりと一団の岩塊があった。人工林も建物もなかった昔の話である。

だから、この岩塊はどこからでもよく見え、古老から、「これが竜の石である。昔、天に昇ろうとした竜が、何かの調子で失敗し、臥竜梅のように空しく地上にのこり、石に化したものである。この石を竜石といい、この辺り一帯を「竜石」と呼ぶのだ」と教えられた。

したがって、この付近に明治のころにできた小学校は竜石小学校と呼び、今のように高千穂と呼ばれることはなかった。竜石小学校が、高千穂と呼ばれるようになったのは大正十年になってからのことである。

注(1) 文化元年（一八〇四）の十一月に、琵琶湖の西岸に

ある堅田町の農夫市郎兵衛は、畑を耕しているうちに奇妙な動物の骨を発見した。この発見は、さっそくに、その地域の領主本多侯の耳に入った。本多侯が学者を差し向けて調べさせたところ、それは書物にある竜骨にまちがいないという鑑定であった。本多侯は、竜の骨が発見されたことはまさに吉兆であるとして土地を竜が谷と呼び、祠を建てさせ、発見者の市郎兵衛には竜の姓を使うことを許した。また、市郎兵衛に

は新しく開墾した土地四畝[※]一五歩[※]の年貢を永代免除にして、「私用勝手たるべし」というお墨付きまで与えており、今日なお、当時描かれた竜骨のスケッチが残っている。

この骨が象の骨の化石であることが判明したのは七年の後（文化八年＝一八一）阿波の小原春造が「竜骨一家言」を著してからである。しかし、この象も自然の歴史の中で位置づけをされたのは、ヨーロッパの進化思想が、明治初年の文明開化の時に紹介されてから後であった。

(2) 大正十年四月、校名改称。

十一 孝子伝

(一) 永岩次郎

今を去る百十余年前（嘉永年間）、飯富神社付近の大園という所（今は田になっている）に永岩次郎という人と老婆が細々と暮らしていた。次郎は農事のかたわら日稼ぎに出る時は母のために薪、水など何くれとなく不自由ないように準備し、冬の寒さ夏の暑さなど気を配り、

他家から振る舞われた菓子餅など食膳に出た物で、母の好物は必ず持ち帰って母の喜ぶのを無上の楽しみとしていた。いつしか母も老衰のため病床に臥^ふすようになり、体も不自由になったので、次郎は母を背負ってお祭りや太鼓踊りに連れて行って喜ばせていた。

ある時母の白髪を洗っていた折縮^{しりぞ}方（当時の藩の高級役人）が通りかかり、平素の孝行に深く感じて殿様に上申して、賞米数十俵を下賜された。

次郎はこれを私せず、その一部で音川下の泥道に切り石を敷いて通行の便をはかった。なお、次郎の家は血統が絶えたので、尾谷口の永岩伊之助氏が跡を継いだといわれている。永岩次郎の孝子碑が飯富神社の門前に建てられている。

(二) 安栖なつ子、弟袈袈次郎

水清く湯量の多い安楽の里に安栖なつ子、弟袈袈次郎の姉弟が住んでいた。父新太郎は家計が不如意のうえ、母と共に永らくの病床生活であったので、この二人が家事一切はもちろん、昼夜付き添い父母の看病のかたわら農事に精出していた。貧窮の中から名医を村の内外から

頼んで高価な薬を続けたが、その効もなく母は早く死亡し、残った父も起居不自由な身となり、朝夕の孝養を尽くすこと前後十余年となった。その孝養が藩主の耳に達して次のような賞米と賞金が贈られた。

一、感状 地頭、肝付郷右エ門

一、賞米三石 知政所

一、金子二百疋 地頭副役 重田平四郎

一、金百疋 跡郷分隊長 平山泰介

この賞詞は明治三年十月二日のことであるが、現在安栖家ではこれら数々の書き付けと記念の大額を家宝として子孫に伝えている。

(三) 高橋万左エ門

高橋万左エ門は跡郷持松村の人(現牧園町字持松)、幼時から孝心深く、よく両親に仕え、壮年に至ると孝養の心ますますあつく老父母の病重き時、昼夜付き添い看護養生に至らないところがなかった。家は笹之段という不便な地にあつて、その集落はほとんどの人々が困窮していたうえ、学問がないことを憂え、相談して学校を建て、万左エ門も共に勉学に励んだ。その行状は世のかが

みだとして、明治九年四月十二日、万左エ門四六歳の時、時の鹿児島県令から表彰の榮に浴し、かつ、賞金四円を下賜された。万左エ門には実子がなく甥に当たる永次郎を養子とした。

表彰状は次のとおり。

第六十四区 小六区跡郷土族

金四円 高橋万左エ門 四十六

右者天稟孝ニシテ老父宗右エ門六十八年老母モヒ六十六年両親ニ事ヘテ一心孝養ヲ尽ス幼少ノ時ヨリ今ニ至リ数十年一日ノ如ク病氣等ノ節ハ昼夜付キ添ヒ且ツ住所笹之段僻陋ニシテ一帯土民困窮シ文学未開ノ処万左エ門周旋シ五ヶ年前共ニ自力ヲ協セ学校ヲ建設シ殊勝ニ勉強シ渾テ本人行状□中亀鑑トナリ名譽大ニ顕シ候段今般巡ラノ警部ヨリ見聞シ趣旨ニ及ビ奇特ノ者ニ候条為褒賞本行之連下賜

鹿児島県令 大山 経 良

明治九年四月二十四日

(昭和二十九年「町勢要覧」参考)

十二 一りん塚

万膳の農村婦人センター入り口の路傍に「一りん塚」

と呼ばれる墓がある。紀年はおろか、その名も刻されていないが、何となしに風格があり、いつもさざげられている香華にもやさしい村人の心根がうかがわれる。今までこの墓の由来は知られていなかったが、たまたま称名墓誌に次のような記事のあることが知られた（意訳）。

一いっ瞰塚は、踊郷万膳村にある。潤脇一いっ瞰院と呼ぶ山伏の墓である。年十八、武者修業に出て、甲斐の武田信玄に仕え、宇山無辺助と名のり、各処に功名をたてたが、築城で有名な甲陽軍鑑にある穴山梅雪の手下六人のうちのひとりである。

称名墓誌は文化十一年（今から一七〇年前）に鹿兒島城下でものされたもので、最近復刻された『新薩藩叢書』にも入れられている。

この宇山無辺助の名はまた、栗野の松尾城の構築を指導しながら、竣工のあかつき、おびき出されて謀殺されたという太田武篇之助という名と酷似しているから、あるいは同人かと思われる。

また、この称名墓誌には、当時の造士館教授吉田蘭卓の絶句を添えて、この跡への感懐の深さを示している。

人の宇山無辺の墓を賦するをみて

身後の芳名かつて功あり

強梁勇健、膚塵の中

孤碑字なし磨いてみるをやむ

愁いて立てば疎林落日の風

（『薩藩叢書』三から）

十三 田の神さあ

頭に米の蒸し器、甑こしきのスノコをかぶり、手にはシャモジやスリコギを持った田の神さあが、鹿兒島県内の田んぼでははおえみかける。田の神信仰は全国にあり、各地とも神社の形をとっているのに、南九州だけでは石像として野にある。

田の神研究をつづける郷土史家は、それには二つの理由があるという。一つは島津藩の「九公一民」といわれた過酷な農民収奪、第二は彫りやすい材料があったことである。シラスに覆われたうえ、多数の武士団を抱えた薩摩藩は徹底して搾った。大昔、始良火山や阿多火山の灰が固まってできた溶結凝灰岩は彫りやすく、農家でも容易に彫れたという。

持ち回り田の神

前記のように、九公一民といわれた政策は、農民を苦しめ、その生活は惨憺たるものであった。米を作る農民が米を食べられず、からいも、粟を常食として、米飯は年



横瀬下馬場



横瀬馬場



横瀬板小屋



万膳西郷

米の粉を塗り装いを新たに、ご馳走を供え、線香をともして郷中の皆が感謝の意を表し、ご馳走を食べて、次の当番の家に「オセロガヤマ」を歌いつつ送って行っ

といつて年二回、旧暦三月・十月の満月の十五日の夜、郷中の人が米や野菜を持って当番の家に集まった。当番の家では精いっぱいのご馳走をつくり、床の間に据えられた田の神像には、顔に小麦粉か

に何回かの節句、家作り、葬式などにしか食べられず、白飯といわれて尊ばれていた。それで農民は、神にすがって一升でも多くの収穫を願ったのである。

昔は「タノカンコ」

る 田 の 神



横 瀬



鳥 府 膳 万



社 神 堅 松 持



田 藤 見 妙



中津川溝口



駅前芦谷原



宿窪田前田



持松笹之段



高千穂栗川

た。

今はこの行事がすたれたところもあり、残っていると
ころもあるが、町内の各地の現状を調べてみた。

田の神さあは、田の畦に据えつけてあるものと、持ち
回り田の神さあの二とおりある。

持ち回り「田の神さあ」

場 所	備 考
横瀬下馬場	一月、九月の十四日の夜行う。一月には餅を搗き、九月には握り飯を供えて、次の当番宅まで田の神像を送る。
持松下臼崎	フランス人形風で、一五〇年くらい前宮崎県から持ってきたものらしい。
三体堂中福良	当番の家の床の間にある。足のふんばり、顔の表情が実直である。
三体堂中野	ふくよかな顔に、おしろいをぬり、はおべにをつけ大きなメシゲを持っている。
万膳古屋志	孫の成長を喜ぶおじいさんの風情がある。
万膳中福良	小柄で素朴で気品がある。メシゲは小さい。毎年一回九月に講があつて、次の当番に送る。

田の畦にある「田の神さあ」

万膳・吉原	当番の家の床の間にある。大きなバツチヨガサが印象的である。
上中津川・健崎	胸に十字のしるしあり。
万膳・西郷	小柄で素朴である。嘉永六年の銘(墨書)があつたらしい。
板小	胸に十字のしるしあり。

場 所	備 考
折橋・藤田宅	段々田のてっぺんにある。右手にメシゲを握った、かわいい像である。
中板小屋・下板小屋	一月、九月の十四日夜、講をする。
上中津川荒瀬越	昔から結婚や新築を招く神として、崇められている。毎年十一月十五日に、講が行われて、抽選で次の座がきまる。
横瀬・湯窪入口	大きなメシゲを持って、落ちついた重みがある。文化十二年(一八一五)の銘がある。
中津川小学校の上手の田	宝暦十二年(一七六二)四月吉日と刻まれている。今から二三〇年前のもので、自然石である。
持松・堅神社の	享保二十年(一七三五)七月吉日の

境内	銘あり、衣冠束帯の姿は他に類をみない。町内では最も古く、県内でもその古さは、一〇番目くらいに属する。今から二五八年前のものである。
持松・笹の段	堅神社境内の田の神像と似ている。頭がこわれて丸石を戴せてある。
飯富神社の鳥居の下	崇高な釈迦像の観がある。小さな祠の中にある。
飯富神社の参道	相当に古いものらしいが、頭は紛失している。
飯富神社前の田	自然石が二つ並べてある。夫婦の田の神か。
鎮守堂の庭	だいぶん風化している。文化十一年（一八一四）二月二日の銘あり。今から一七八年前のものである。
下瀬戸口・松下宅	ハカマにタスキ姿で、メシゲはこわれている。
麓の前田の田の畦道	俵の上にまたがり、稲穂を右肩に左手にメシゲを持っている。記念碑に彫刻されたもので、大正四年四月四日建設。
宿窪田・城ヶ後	ウケモチ神社の銘があるので、馬頭観音として信仰されたものらしい。
万膳・府鳥	ミノ・カサをつけた老人の姿で、大きな自然石に田の神像と、祠をいっし
大型農道下	

高千穂・栗川

よに彫つてある。
明和六年（一七六九）の銘がある。
今から二二三年前のものである。

以上町内の田の神を列記した。記載漏れのものもあると思われるが、南九州の農民たちの心のたたずまいであり、懐かしい造形作品であり、尊いわれわれの祖先が残してくれた貴重な文化遺産である。

〔参考〕田の神の文化財指定

鹿児島県が、文化財として二〇か所の田の神さあを指定している。この中で一番古いのは、入来町仲組にある田の神で、宝永八年（一七一）二月吉日、今から二八一年前のものである。始良郡内では五か所指定されているが、蒲生町漆の田の神が、享保三年（一七二八）というから二七四年前で一番古く、加治木町木田の田の神が、明和四年（一七六七）で二二五年前、蒲生町下久徳の田の神が、明和五年（一七六八）で二二四年前、吉松般若寺の田の神が、明和九年（一七七二）で二一九年前、隼人町宮内の田の神が、天明元年（一七八一）で二二〇年前のものである。